

クルグズスタン（キルギス）の革命  
-エリートの離合集散と社会ネットワークの動員-

宇山 智彦

はじめに

グルジア、ウクライナ、クルグズスタンの「革命<sup>1</sup>」のなかで、クルグズスタンのケースは、十分に明確な政策を持ったリーダーがいなかったこと、アスカル・アカエフ大統領の逃亡で突然の幕切れを迎えたこと、その後も政治的混迷が続いていることから、最も分かりにくいというイメージが持たれているように思われる。本稿では、革命と関連諸事件の概要を述べたのち、一連の事件がいかなる意味で「革命」と呼びうるのかを、前政権の性格と危機への対応の姿勢、事件への大衆の参加とそれを支えたダイナミズムおよびネットワーク、新政権の性格・問題点とその背景、という3つの視角から分析し、国際関係との関連も簡単に述べたい。その際特に、革命をきっかけに地域対立やアメリカの「陰謀」によって説明しようとする説を批判し、新しい見方を探っていく。

1. 革命と関連諸事件の概要<sup>2</sup>

1.1 国会選挙をめぐる混乱

革命の動きは直接には、2005年2～3月の国会（ジョゴルク・ケネシュ）選挙をめぐる始まった。まず、1月6日にローザ・オトゥンバエヴァ元外相の候補者登録が選挙区の選挙管理委員会によって拒否され、これに抗議する集会在ビシケクで数日間にわたり開かれた。登録拒否の公

<sup>1</sup> 後で述べるように、クルグズスタンでの2005年3月の事件は、政治学における一般的な意味での「革命」とは呼びにくい面があるが、それでも「革命」という概念を用いて分析する意味のある事件だと筆者は考えており、以後、原則としてカギ括弧を付けずに革命と書くことにする。また、グルジアの「バラ革命」やウクライナの「オレンジ革命」に倣って、事件を「チューリップ革命」と呼ぶこともあるが、チューリップがシンボルとして特に広く使われたわけではなく、「チューリップ革命」という言葉も現地でそれほど一般的ではないため、本稿では用いない。

<sup>2</sup> この節では煩雑を避けるため細かな注を付けないが、記述は主に、AKIpress [<http://www.akipress.org>] と RFE/RL [<http://www.rferl.org>] の報道、*Kyrgyz Republic Parliamentary Elections, 27 February and 13 March 2005: OSCE/ODIHR Election Observation Mission Final Report* (Warsaw: OSCE/ODIHR, 2005) [<http://www.osce.org/item/14456.html>]、および G. O. Pavlovskii, ed., *Kirgizskii perezvorot: Mart – april' 2005* (Moscow: Evropa, 2005) をもとにしている。また、革命に至る経緯については、遠藤義雄「キルギスタンのチューリップ革命」『海外事情』2005年5月号、17-26頁、も参考になる。なお、脚注に示す URL は特記以外 2006年7月19日現在有効である。



クルグズスタン概略図

式の根拠は、過去 5 年間国内に常住していた者でなければ立候補資格を持たないとする、憲法（第 56 条）および選挙法（第 69 条）の規定であった。オトゥンバエヴァは駐英大使および在グルジアの国連事務総長特別副代表として、長く国を離れていたのである。既に前年 12 月にも、3 人の元大使などの候補者登録が拒否されていた。しかし公務での外国滞在を例外と認めずオトゥンバエヴァの登録を拒否したことの実質的な目的は、同じ選挙区から立候補を予定していたアカエフの娘、ベルメト・アカエヴァの有力な競争相手を排除することにあったと言われる。

選挙直前になると地方で相次いで情勢が緊迫化した。ナルン州のコチコル選挙区では、2 月 21 日にアクルベク・ジャパロフ、ベイシェンベク・ボロトベコフ、クルマンベク・バイテレコフの 3 人の候補者登録が選挙民買収の嫌疑で取り消され、これに抗議する人々が翌日から、ビシケク〜トルガルト（中国国境）街道を封鎖した。イッシク・クリ（クルグズ語ではウスク・コル）州トン選挙区でも、アルスラン・マリエフの候補者登録が買収の嫌疑で取り消されたことに抗議する人々が、22 日以降ビシケク〜カラコル（旧プルジェヴァリスク）街道を封鎖し、トン郡庁の建物を占拠した。一般に、反アカエフ派の根拠地は南部とされるが、革命につながる実力行使がむしろ北部のコチコルとトンで始まったことは注目に値する。コチコルの人々はのちにアカエフ追放をもたらす 3 月 24 日の集会でも主力の一部をなした。

投票は 2 月 27 日に行われたが、政権側による多くの不正が行われたとする反対派の抗議集会が、翌日から首都や南部で開かれた。この投票で当選者が決まったのは 75 選挙区のうち 31 にとどまり、42 の選挙区で 3 月 13 日に決選投票が行われることになった。そのほかトン選挙区では、2 月 27 日に投票ができなかったため 3 月 13 日に第 1 回投票を行うことになった。コチコル選挙区ではトゥルダクン・ウスバリエフ候補<sup>3</sup>が他の候補より多くの票を得たものの、「全員に反対」の票が過半数を占めたため、期日を改めて再投票を行うことが決められた。

その後政権側と反対派の争いはますます深刻化し、特に南部での動きが激しくなった。3 月 1 日、オシュ州カラスー郡でアラプバイ・トロノフ候補の支持者が、ジャララバード（ジャララバト）州ノーケン郡でドーロンベク・サドウルバエフ候補の支持者が、それぞれ投票のやり直しを求める集会を開いた。4 日にはジャララバード市で反対派がアカエフ退陣を明確に求める集会を開始し、州庁舎を占拠した。ジャララバード州はクルマンベク・バキエフ元首相（現大統領）を含む多くの反対派政治家の出身地で、革命の流れの中で先導的役割を果たした。6 日にはナルン州ナルン郡で、イシェンバイ・カドウルベコフ候補の支持者たちがビシケク〜トルガルト街道を封鎖し、通りかかった州知事を人質に取った。混乱のなか迎えた 13 日の第 2 回投票は 39 の選挙区で実施され（2 つの選挙区では 20 日に延期、コチコルでは無期限延期）、翌 14 日には暫定結果が発表された。しかしその日のうちに取り消しを求める集会が南部の各地で起きた（オシュ州アライ郡でマラト・スルタノフ候補の支持者が道路を封鎖、同州ウズゲン市でアダハン・マドゥマロフ候補とその支持者が郡庁舎を占拠）。アカエフ夫人の出身地タラスでも、ラフシャン・ジェー

---

<sup>3</sup> 1919 年生まれ。1961～85 年、クルグズスタン共産党中央委員会第一書記。ゴルバチョフ期には不遇をかこっていたが、1992 年から国会議員として政界復帰していた。

ンベコフ候補の支持者が州庁舎を占拠した。コチコルでは、ウスバリエフが再投票に出馬する権利を認めた裁判所の決定に対し、ジャパロフ派などが激しく抗議した。

## 1.2 革命から新大統領選出へ

15日、ジャララバードで全国の反対派を集めたクルルタイ（大会）が開かれ、アカエフ退陣、大統領選挙の繰り上げ実施、国会選挙のやり直しを求めると共に、「クルグズスタン国民統一調整会議」を創設した。19日にはオシュでもクルルタイが開かれた。両市では反対派と警察の攻防が続いたが、20日にジャララバードで、21日にオシュで、州庁、市役所、内務機関などの建物と空港が最終的に占拠され、南部は実質的に反対派が掌握するところとなった。19日から22日までトクトグルでトクトスン・マディヤロフ候補の支持者がビシケク～オシュ街道を封鎖したため、国の北部と南部を結ぶ交通が麻痺し、北部の警察部隊を南部に送ることもできなかった。

ビシケクでは比較的平穏な状況であったが、メリス・エシムカノフ候補らが活発に抗議行動を展開し、19日には彼やジャパロフの支持者ら3000人以上が、町はずれで集会を開いた。22日に新しい国会の最初の全体会が開かれたが、23日になると、当選したベルメト・アカエヴァの対立候補だったボロトベク・マリポフの支持者らが都心部で抗議集会を開いた。24日には反対派の指導者たちが結集し、アカエフ打倒を唱える大規模なデモ行進を行った。引き続き都心のアラトー広場で集会が開かれたが<sup>4</sup>、ここではアカエフ派が動員した人々が待ち構えていた。革命派のシンボルカラーがピンク色ないし黄色であるのに対し、白い帽子をかぶったアカエフ派の集団は、集会参加者に大量の石を投げつけた。騎馬警察隊も現れたが、集会参加者の一人が馬を奪い、旗を持って広場を駆け回った（この様子はテレビで世界に流された）。

白帽軍団や警察との対立が続く中、地方からの増援によってますます数を増した集会参加者は、広場の斜め前の大統領府・政府庁舎（いわゆるホワイトハウス）に流れていき、ドアを壊して内部に乱入した。治安機関に裏切られたと感じたアカエフは、数時間前に逃亡していた<sup>5</sup>。政権はあっけなく倒れた。反対派関係者の多くは、大統領府突入はアクシデントで、大統領辞任を平和的に求め続けるつもりだったと述べているが、南部の革命指導者の中には、この日に突入するのは予定外だったものの、集会参加者を南部から次々と首都に送り込んで28日前後に突入するつもりだったと証言する者もいる<sup>6</sup>。

---

<sup>4</sup> 集会の参加者数については明確な資料がないが、大体1～2万人といわれる。たとえば以下を参照。Erica Marat, *The Tulip Revolution: Kyrgyzstan One Year After, March 15, 2005 – March 24, 2006* (Washington, DC: The Jamestown Foundation, 2006) [<http://www.jamestown.org/images/pdf/Jamestown-TulipRevolution.pdf>], p. 13.

<sup>5</sup> Aleksandr Kniazev, *Gosudarstvennyi perevorot 24 marta 2005 g. v Kirgizii*, glava 3.1 [<http://www.analitikk.org/politics/2006/03/29/4380.html>]. (2006年5月1日閲覧)

<sup>6</sup> ジャララバード州庁での聞き取り（2005年9月26日）。なお、本稿で用いるインタビューは必ずしも匿名を条件で行ったものではないが、万が一迷惑がかかる可能性を考えて匿名で記す。

その後夜にかけて、ビシケク市内各所で商店などの略奪が始まった。集中的に狙われたのは、アカエフの長男アイダルが経営に関わっていたとされるスーパーマーケットやショッピングセンターだが、全く無関係の店も次々と襲われた。この略奪については、①権力の空白の中で自然に起きた、②アカエフ派が革命派の信用を失墜させるために起こした、③革命派が支持者の中の犯罪分子を満足させるために起こした、という3種類の説がある。商店主自身が財産を守るために、略奪者に紛れて商品を運び出していたケースもあるといわれる。

革命派の一部は大統領・政府庁舎の占拠後、フェリクス・クロフ元副大統領が服役する監獄に向かい、彼を解放した。クロフはその日のうちに、治安回復の責任者となった。また旧国会の議員たちも会議を開き、バキエフを大統領代行兼首相代行に選んだ。旧国会が召集されたのは、革命派が選挙に疑義を呈している、新国会の正統性を否定する意見があったため、数日間は新旧2つの国会が並立する異常事態となった。しかし中央選挙管理委員会は一部の選挙区を除いて選挙は合法であったと判断し、旧国会は29日に活動を停止して、新国会が最終的に正統性を得た。

カザフスタン経由でロシアに亡命したアカエフは辞任を拒んでいたが、オムルベク・テケバエフ国会議長率いる代表団とモスクワで会い、4月4日に、翌日付で辞任する旨の文書に署名した(11日に国会承認)。

国会選挙の結果をめぐる争いはその後も続いた。コチコルでは、財務相代行に就任したジャパロフ(現財務相)が4月4日に、武装警官らを引き連れてウスバリエフの甥の家とバイテレコフ派の集会を襲い、負傷者を出すという事件があった<sup>7</sup>(ウスバリエフは結局再出馬をあきらめた)。また元候補者が当選者を選挙違反のかどで訴えるなどして、当選が取り消されるケースが相次いだ。父母や弟(アイダル)と違って勇敢にも帰国したベルメト・アカエヴァを含め、女性候補者は結果的に全員が当選を取り消された。前出のマディヤロフの支持者は、選挙結果に不満を持つ他の元候補者の支持者と共に、4月27日から6月2日に至るまで最高裁判所を占拠した。

アカエフ辞任に伴う大統領選挙に向けて、当初さまざまな政治家が運動を始めたが、2人の最有力候補バキエフとクロフが、前者が当選すれば後者を首相にするというタンデムに合意した。クロフの方が国民の人気(特に北部での)は高いが、革命のリーダー、かつ革命の中心となった南部の出身者として正統性を持つのはバキエフであった。また、2人とも立候補すれば南北の対立を招きかねないという判断が双方にあっただろう。7月10日の投票は、6人の候補者がいるとはいえ事実上バキエフの信任を問うものとなり、彼は88.7%の票を得て当選した。

---

<sup>7</sup> Gennadii Kuz'min, "Vooruzhen i ochen' opasen," *Moia stolitsa*, 08.04.2005 [http://www.msn.kg/page.shtml?option=item&year=5&mon=4&id=9900].

## 2. 寿命の尽きたアカエフ政権

「革命」にはいくつもの定義があるが、漢語としての原義は、「天命」の尽きた統治者が実力によって打倒されるということである。アカエフらは、旧政権は自ずと命運が尽きたのではなく、順調に国を運営していたにもかかわらず陰謀で倒されたと主張するが<sup>8</sup>、果たしてそうなのか、それとも倒れるべくして倒れたのか。政権の歩みを簡単にふり返りながら検討したい。

### 2.1 民主派大統領の体面と権威主義的手法の矛盾

1989年からクルグズスタン科学アカデミー総裁を務めていたアカエフは、90年6月のオシユ事件（クルグズ人とウズベク人の流血の衝突）への対処で共産党第一書記アブサマト・マサリエフが信用を失う事態の中で行われた、初の大統領選挙（同年10月）で当選した<sup>9</sup>。この選挙は国民の投票ではなく、最高会議の中でのものだったが、広場ではマサリエフを批判する集会が開かれていた。アカエフは、民主化要求の後押しで誕生した大統領だったのである。クルグズスタン独立後も、他の中央アジア諸国がしだいに権威主義への傾斜を深める中で、言論と反対派活動の自由を維持し、同国は「民主主義の島」と言われ、経済面でも急進的な市場化改革を志向した。隣国カザフスタンやウズベキスタンより人口も経済規模も小さく、資源も乏しいクルグズスタンを国際社会に売り込むために、民主主義と市場経済化の旗を高く掲げることは重要であり、実際に欧米諸国や日本から高く評価された。

しかし、具体的な政権運営のモデルとして参照しやすいのは、他の中央アジア諸国やロシアの体制であり、権力を保つために権威主義的な手法をとりたいという誘惑が常に存在した。1995年12月の大統領選挙では対立候補に圧力が加えられたうえでアカエフが再選され、翌96年2月には大統領の権限を大幅に拡大する憲法改正案が、国民投票により賛成94.5%で可決された。反対派政治家・ジャーナリストへの突発的・恣意的ないやがらせも頻繁になっていった。しかし、アカエフが民主派大統領としての体面にこだわるために、徹底した反対派排除はできないという矛盾があった。

---

<sup>8</sup> アカエフは革命1周年を前にしたインタビューで、1年前までのクルグズスタンでは「社会経済的発展がますます進み」、「市民社会が力をつけ」、「民族間関係は模範的」であり、「次の数年の間に共和国は質的な躍進を遂げるはずで、そのためのしっかりした基礎が築かれていた。しかし1年前に邪魔が入った」と述べている。Viktoriiia Panfilova, "Askar Akaev: revoliutsiia glazami eks-prezidenta," *Nezavisimaia gazeta*, 21.03.2006 [[http://www.ng.ru/ideas/2006-03-21/1\\_akaev.html](http://www.ng.ru/ideas/2006-03-21/1_akaev.html)].

<sup>9</sup> 筆者はこれまで、アカエフはマサリエフを破って大統領に当選したと書いていたが（宇山智彦『中央アジアの歴史と現在（ユーラシア・ブックレット No.7）』東洋書店、2000年、47頁；宇山編著『中央アジアを知るための60章』明石書店、2003年、210頁；宇山「アカエフ」川端香男里ほか監修『新版 ロシアを知る事典』平凡社、2004年、11頁；同「アカエフ」小松久男ほか編『中央ユーラシアを知る事典』平凡社、2005年、10頁）、厳密には、最初2回の投票（アカエフは不参加）ではマサリエフの得票が最多であったものの議員数の過半数に届かず、候補者をすべて入れ替えて投票し直した結果、アカエフが当選したという経緯であった。A. Erkebaev, *1990 god: prikhod k vlasti A. Akaeva* (Bishkek: Kyrgyzstan, 1997), pp. 68–72. 訂正したい。

## 2.2 エリートの結束の弱さ

体制派エリートにも亀裂が生じた。内務相として 1991 年のモスクワ保守派クーデタに敢然と反対してアカエフを守り、その後副大統領やチュイ州知事などを歴任していたクロフは、大統領周辺が彼を中傷する噂を流していることに抗議し、99 年 4 月にビシケク市長を辞任して反対派に転じた。彼は 2000 年 2 月の国会選挙に立候補し、第 1 回投票では優勢だったが、翌月の決選投票で不自然に得票が減って落選し、そのうえ横領などの嫌疑で逮捕・投獄された。これは、同年 10 月の大統領選挙に向けてアカエフの競争相手を排除するための工作と見られた。憲法の三選禁止規定によりアカエフはこの選挙に出られないはずだったが、前々回までの選挙は現行憲法成立以前のものだからカウントされないという憲法裁判所の判断を得て出馬し、勝利した。

2002 年 1 月、中国との国境画定協定による領土割譲を激しく批判していたアジムベク・ベクナザロフ議員が逮捕されると、彼の釈放とアカエフ辞任を求める大規模な運動が起こった。そして同年 3 月には彼の地元であるジャララバード州アクス郡でデモ隊に治安部隊が発砲し、6 人が死亡する事態となった。現在、アクス事件は革命の出発点として語られることが多い。5 月にアカエフは事件に対する政府の責任を認め、バキエフ首相が辞任に追い込まれた<sup>10</sup>。バキエフは 11 月に、「政権側でも反対派でもない」という立場で 05 年の大統領選挙への立候補を表明したが<sup>11</sup>、翌 03 年には次第に政権批判を強めていった。

興味深いのは、反対派になっても政治生命を維持する政治家が多かったことである。クロフは投獄中も人気があっただけでなく、仲間たちと緊密な連絡を保っていた<sup>12</sup>。カザフスタンでも有力な政治家が反対派に転向した例は多いが、彼らが徹底的に干され（あるいは巧妙に懐柔され）、残った体制派エリートが結束を維持するのと対照的である。政権内にもイシューによってアカエフに批判的な意見を言う閣僚がいるなど、クルグズスタンの体制派エリートの結束は固くなかった。そもそもアカエフが 1990 年に大統領に当選できた理由の一つは、アパス・ジュマグロフ閣僚会議議長が共産党を代表してマサリエフを大統領候補に推薦しておきながら、他の議員に推薦されると自ら立候補してマサリエフの票を奪うという裏切りを演じたためであるが<sup>13</sup>、そうしたエリートのまとまりのなさはアカエフ時代にも引き継がれ、政権の弱点であり続けた。アカエフ夫妻がレニングラードで勉強していた時代からの親友で、大統領府長官などを歴任したミシル・アシュルクロフは 2004 年 5 月に反対派と共に市民同盟「誠実な選挙のために」を結成し、安全保障会議書記の職から解任された。アカエフと盟友たちとの信頼関係は弱くなるばかりであった。

<sup>10</sup> バキエフがアクス事件にどの程度関与していたかについては、未だに不明な点が多い。

<sup>11</sup> “Eks-prem'er KR K. Bakiev budet ballotirovat'sia v 2005 g. na post prezidenta,” *AKIpress*, 15.11.2002 [<http://kg.akipress.org/news/3998>].

<sup>12</sup> クロフは、外部の情報源を維持できたと共に、監獄の中でさまざまな人々につきあうことによって多くの経験を得たとして、投獄生活を肯定的に回想している。次のインタビューを参照。“Feliks Kulov: ‘Na zone ia pomudrel, nauchilsia terpeniiu i ponimaniuu situatsii,’” *Ferghana.Ru*, 13.12.2005 [<http://news.ferghana.ru/detail.php?id=366249070369.64,1933,2327931>].

<sup>13</sup> Erkebaev, *1990 god*, pp. 65–68. ジュマグロフはアカエフ政権下でも首相など要職を務めた。在ロシア大使として革命後にアカエフの辞表署名に立ち会い、2006 年 7 月現在もその職にある。

## 2.3 家族の悪評

一方、経済改革は貧富の差を広げ、大多数の国民の貧窮が続いた。特に、1990年代末以降隣国カザフスタンの経済が本格的に成長を始めたのに対し、クルグズスタンの停滞は明らかだった。国民の不満にさらに油を注いだのは、大統領の家族の悪評である。妻のマイラムは、慈善基金「メーリム」の総裁として企業家・商売人たちから金を集めていただけでなく、夫の政策にあらゆる面で口出しをしていたと言われる<sup>14</sup>。長男のアイダルは、財務相顧問などの公職を務めるほか、数多くの企業に影響力を持っていたが、誰かがビジネスで成功するとすぐにつぶして儲けを横取りしようとする、麻薬の大規模な取引をしている、飲み歩いてはレストランで客にからむ、数多くの女性をレイプした、などさまざまな噂・悪評が立っていた<sup>15</sup>。長女のベルメトはアガ・ハン基金などのコンサルタントを務めていたが、父に対しても何かと意見を言っていたとされる。彼女の夫アディル・トイゴンバエフ（カザフ人）は、多くの大企業・工場に影響力を持ち、特にマスメディアを牛耳っていた。大統領夫妻の兄弟姉妹もさまざまな要職に就いていた。

実は、大統領の妻や子・娘婿が各界に影響力をふるうという構図はカザフスタンと共通しており、アカエフ家はナザルバエフ家のまねをしたのではないかという見方もある（短い間ではあるが、アイダルとナザルバエフの三女アリヤの結婚を通して、両家は姻戚関係にあった）。しかし石油で潤うカザフスタンと違い、貧しいクルグズスタンで大統領一家が富を貪っているというイメージは致命的であった。またアカエフ本人の性格的な弱さもあって、家族の口出しは度を超していたらしい。そのような状況の中で、ベルメトとアイダルが国会選に立候補したことは、国民の反感を大いに煽ることになった。

アカエフの大統領としての任期はもともと 2005 年末に切れる予定で、彼は公的には、10 月に予定される選挙には出ないと言っていた。しかしあいまいな発言も多く、超法規的な方法を使って再選を狙っているのではないか、あるいは妻が後継者になるのではないかという噂が絶えなかった。革命後にベクナザロフ検事総長は、国家書記室で「国民投票によるアカエフ大統領の 2010 年末までの任期延長について」という一連の文書が見つかったと発表している<sup>16</sup>。大統領選の問題は別としても、国会選に家族が立候補したことは、アカエフと一族が権力を手放す気がないことを印象づけた。前述のように、ベルメトの立候補した選挙区で他の候補者が登録拒否などの妨害

---

<sup>14</sup> マイラムの自伝には、世界の要人たちと一緒に撮ったものを含め彼女の多数の写真が収められ、本文でも夫や子どもたちを褒めちぎるだけでなく政治に対する自分の見方を随所で述べており、彼女の野心的な性格が窺える。Mairam Akaeva, *U nadezhdy ne byvaet nochi: Zapiski zheny Prezidenta* (Moscow: Voskresen'e, 2003).

<sup>15</sup> ある元特殊部隊員からの聞き取り（ビシケク、2005 年 9 月 22 日）、および Pavlovskii, ed., *Kirgizskii perevorot*, p. 51. なお、革命後の 4 月 18 日にバキエフ政権は、アカエフ一族の財産を調べるために委員会を設置し、42 の企業等を調査対象として挙げたが（“Perechen' 42 predpriatii, podlehashchikh proverke na predmet prinadlezhnosti Pervomu Prezidentu KR A. Akaevu,” *AKIpress* [<http://kg.akipress.org/news/18983>].）、所有関係が複雑で、アイダルら一族が実際にどの程度の割合でそれらの企業の所有・経営に関与していたかは明らかになっていない。

<sup>16</sup> “Obnarodovany svidetel'stva makhinatsii Akaeva v khode vyborov,” *RIA Novosti*, 22.04.2005 [[http://www.rian.ru/defense\\_safety/investigations/20050422/39724803.html](http://www.rian.ru/defense_safety/investigations/20050422/39724803.html)].



を受けたことは、全国の選挙区に混乱が広がる発端となった。また大学生らがベルメトに投票するよう前々から圧力を受けていたことをきっかけに、1月に反対派の青年組織「ケルケル」が生まれた。これに対しアカエフ派は全く同名の親政権派組織を作って混乱させようとするなど、稚拙な対応を取った<sup>17</sup>。

## 2.4 アカエフの当事者能力喪失

体制派エリートのまとまりのなさは、選挙そのものにも現れた。体制派を代表する2つの政党であったアルガ・クルグズスタン党（2003年9月に体制派4党が合同して結成した党）は25、アディレト党は18の選挙区に候補者を立てたが、うち6つの選挙区（第12、13、14、27、37、51）で競合し、その中の2つの選挙区（第13、37）で共倒れした<sup>18</sup>。マイナーな体制派政党である「新しい力」も、第74選挙区でアディレト党と競合した。さらにいえば、全体のうち圧倒的多数を占める無所属（自薦）の候補者もかなりの部分は体制派であり、実際には極めて多くの選挙区で体制派が競合していたと見られる。たとえば、第9選挙区ではニコライ・タナエフ首相の息子が立候補してアルガ・クルグズスタン党の候補に敗れ、第62選挙区ではアカエフと親しいカヌベク・イマナリエフがアディレト党の候補者を破った。「民主的な選挙」に見せかけるため1つの選挙区に体制派の候補をあえて複数立てることは、他の中央アジア諸国（特にウズベキスタン）でも行われているが、クルグズスタンのこの選挙の場合、付録1の注に示したように、体制派同士の関係が紛糾した選挙区がいくつもあることから、作為というよりは統制が取れていない面が大きかったと思われる。

さて、革命直前の危機の高まりのなかで、OSCE（欧州安全保障協力機構）の代表や大統領付属国際戦略研究所などが反対派との話し合いをアカエフに勧めたが、彼は応じなかった<sup>19</sup>。3月

---

<sup>17</sup> Gulnoza Saidazimova, “Kyrgyzstan: Youth Leader Speaks about Opposition Organization’s Intentions,” *RFE/RL News & Analysis*, 28.02.2005 (RFE/RLの記事は日付やタイトルから容易に検索できるので、URLは省略する)。偽「ケルケル」のウェブサイト [<http://www.kelkel.kg/>] (2005年11月14日閲覧)には、「若いうちに遊んでおけ! (Guliai poka molodoi!)」という標語が書かれ、活動紹介として「デモ反対、革命反対」という横断幕を持ってスキー場に遊びに行った時の写真が載せられていた。

<sup>18</sup> 付録1が依拠した資料から計算。第1回投票までに立候補を取り下げたケースは除外した(2月27日時点の候補者リスト “Itogovyi spisok 389 zaregistrirovannykh kandidatov v deputaty ZhK KR na 27 fevralia 2005 g.,” *AKIpress*, 27.02.2005 [<http://kg.akipress.org/news/17537/>] で確認)。

<sup>19</sup> 大統領付属国際戦略研究所での聞き取り (ビシケク、2005年9月22日)。反対派諸政党の連合体「クルグズスタン人民運動」のボルジュロヴァ副議長は、3月22日の時点で、数日前から交渉を呼びかけているのに政権側が応じないと述べていたが (*RFE/RL Newslines*, 23.03.2005)、アカエフは3月29日にラジオ「モスクワのエコー」のインタビュー [<http://echo.msk.ru/interview/35429/>] で、国会が反対派と交渉するための委員会を22日に作ったのに反対派は応じなかったと言っており、見解が一致しない。確かにオトゥンバエヴァが自分たちの目標は交渉ではなく大統領の辞任だと述べるなど (*RFE/RL Newslines*, 22.03.2005)、反対派指導者たちの態度は一致しておらず、彼らが本気で交渉するつもりがあったかはやや疑わしい。しかしドゥシェバエフ内務相代行が24日朝にバキエフらと会った後、彼らに交渉の用意があることをアカエフに伝えに行くと証言するように (Mikhail Zygar’, “Kontrevoliutsionnaia situatsiia,” *Kommersant*, 28.03.2005 [<http://www.mezhdunarodnik.ru/>])

24日には、首都での大集会を白帽軍団が攻撃した結果、集会参加者側も力で対抗する姿勢を強め、大統領府突入に至った。白帽軍団は、元柔道のコーチで自動車市場を経営し、犯罪組織との関係も噂されていたジュルガルベク・スラバルディエフが、アカエフの意向を受けて組織したものとされる。挑発しておきながらそれによる混乱を收拾する能力がないというのが、末期のアカエフ政権の実態であった。

アカエフは、集会に発砲するなど命令したと述べているが、これについては彼の最後の功績として評価する見方と、命令しても警察は発砲しなかつたであろうという見方がある。23日に内務相代行に任命されたケネシュベク・ドゥシェバエフは、任命直後には武力行使も辞さないと言っていたが、24日朝には反対派の集会に自ら顔を出し、「集会が平和的である限り一切手を出さない。警察は人民と共にある」と融和的な姿勢を示した。かつてアクス事件の際、政権中枢の命令で発砲したのに個々の警察官らに責任が押し付けられたことは治安機関の中に不満を呼んでおり、アカエフ政権自体も、発砲で政権への不信が高まったことを自覚し、その後は武力行使に慎重になっていたと思われる。いわばアクス・シンドロームとも呼ぶべき現象である<sup>20</sup>。技術的にも、警察には実弾を使わずに群衆を管理する能力が不足していた<sup>21</sup>。ただいずれにしても、アカエフが民主派大統領としての体面を保とうとし続け、それゆえ選挙期間中も集会の間も、反対派排除の手段を武力ではなくいやがらせにとどめたのは確かだろう。

なお、アカエフ政権が不人気だったとはいっても、即時辞任を求める声で国民全体が一致していたわけではない。革命前の非公開の世論調査では、国民の約15%は完全に反アカエフ、35~40%は政権が変わっても状況は悪くなるだろうという意味でアカエフ辞任反対、残りは明確な意見を持っていなかったという（ただし、大統領側の機関が実施した世論調査なので若干割り引いて考える必要があろう）<sup>22</sup>。選挙の結果（3月26日時点）も、付録1に見るように、当選者69人中アカエフ派政党からの立候補者が23人、政党の公認を受けず自薦で立候補したアカエフ派が7人、立場が明瞭ではないが中間派ないしアカエフ派と思われるものが31人というものであった。彼らの一部は不正な工作で当選したのであろうが、選挙の経緯や結果そのものをめぐって大きな争いが起きた選挙区は十数カ所で、全体から見れば少数であり、不正がなかったら反対派が国会選で圧勝していたと考える根拠は見出しがたい。

しかし反対派の攻勢に対し、アカエフを積極的に守ろうという動きは乏しかった。革命直後、アカエフの出身地で最も支持が堅いと見られていたケミン（チュイ州東部）では、集団でビシケ

---

digest/605.html])、限定的な話し合いの余地はあったと思われ、アカエフの発言は責任逃れの可能性が高い。

<sup>20</sup> Erlan Karin, "Barkhatnyi sezon v Tsentral'noi Azii: kyrgyzstanskaia model' smeny vlasti," *Vestnik Evrazii* 2 (2005), pp. 198–199.

<sup>21</sup> OSCE はクルグズスタンで警察の改革と訓練に協力するプログラムを実施しているが、群衆管理の訓練は当時まだ始まっていなかった（OSCE ビシケク・センターでの聞き取り、2005年9月30日）。

<sup>22</sup> 大統領付属国際戦略研究所での聞き取り（ビシケク、2005年9月22日）。

クに行進しようという動きが見られたが（結局不発）、彼らの目的はビシケクにいる同郷人を襲撃から守ることであり、アカエフ政権を復活させることではなかった<sup>23</sup>。

以上のように、権威主義的手法と民主派大統領の体面の矛盾、エリートの結束の弱さ、アカエフの事態收拾能力の低さと家族の悪評という問題を抱えたアカエフ政権は、倒れるべくして倒れたと言えるだろう。

### 3. 革命のカーニバル性と地方性：市場経済化の作用

「革命」は多くの場合、大衆の大規模な参加を前提とした概念である。この節では、クルグズスタンの革命に一般の人々がどのように参加したかを、その背景と共に考察したい。

#### 3.1 公的祝祭に取って代わった群衆行動

一連の事件で人々がどのような行動をとったのかを報道や聞き取りから復元することは難しいが、筆者は、2005年3月21日のオシュ州庁占拠前後の様子を現地の Mezon TV 社が撮影したビデオを、同年9月27日にオシュで閲覧する機会を得たので、まずその様子を紹介したい。

朝、市の中心部の公園に人々（少年も多い）が集結する。オシュ大学の副学長が解散を呼びかけるが効果はない。人々に火炎瓶が配られ、革命派リーダーの一人（のち州第一副知事に就任）が使い方を説明する。群衆は州庁前のレーニン広場に向かって行進を始める。途中、棒で店の看板を壊す者もいるが他の人に叱責され、大体規律は取れている。ちょうどこの日はノールズ（春分祭）で、広場には出店などがあるが、群衆を見て撒収し、子どもたちも避難する。

州庁の前には盾を持った警官等がびっしりと並んでいるが、群衆を見ると、何もせず一斉に逃げ出す<sup>24</sup>。群衆の一部は、逃げ遅れた指揮官に殴りかかるが、馬に乗った人が彼を自分の後ろに乗せる（助けたと同時に見世物にした雰囲気である）。その間に群衆は難なく州庁に突入し、州庁の幹部の椅子でふんぞり返る人もいる。一部はさらに市の内務局と国家保安局を占拠しに行くが、ここではもはや統制が取れず、激しい勢いで火炎瓶による放火と投石が行われる。他方、レーニン広場ではオトゥンバエヴァ、テケバエフ、アンヴァル・アルトゥコフ（後述）らが演説する集会が始まり、すっかり落ち着いた様子になる。警察指揮官もマイクに呼ばれ、こわばった表情で、人民を支持すると宣言する。

ここから見て取れるのは、一面では、日常の秩序が転倒し、一定の規律はあるものの、大っぴらに火炎瓶を持ち歩いたり投石したり（石もあらかじめトラックで持ち込まれていることがしばしばだった）、また権力を象徴する空間を占拠したり物を持ち出したりしていた様子である（3月

<sup>23</sup> Zygar', "Kontrrevoliutsionnaia situatsiia."

<sup>24</sup> この日に警察が全く無抵抗で州庁舎を明け渡したのは、既にこの地域での革命派勝利の趨勢が見えていたからだろう。前日までのジャララバードとオシュでは、時に革命派と警察の激しい衝突があった。

24日のビシケクについても、大統領府の看板を誇らしげに持って歩く若者の写真がメディアに流れた。しかし他方で、落ち着いて集会が行える状況になると、演壇の上のぼる革命派指導者と、下にいる一般の人々の区別は明確になる。

一時的な秩序の転倒は、革命のカーニバル的・祝祭的要素を示していると思われる。都市での革命の中心的な舞台となった広場は、ノールズを含め公的な祝祭が行われる場所であり、特にオシュの場合はタイミングがノールズに重なったことから、年中行事的な祭が全く非日常の事態に取って代わられる状況が観察できた。町によっては、祭の時と同様、広場に遊牧民伝統の天幕が張られ、煮炊きが行われる場合があった。19日のオシュでのクルルタイも、唄や漫才が演じられるなどショーの要素があったという<sup>25</sup>。

### 3.2 動員のメカニズム：地域ネットワークと金銭

ただし、集会の舞台は都市の広場でも、参加者がその町の人々だとは限らない。参加者の少なからぬ部分は農村からやって来ていた可能性が高い<sup>26</sup>。特に24日のビシケクでの集会には、コチコルやオシュなどの人々がそれぞれ集団でやって来ていた。それでは、人々はどのようにして集会に動員されたのだろうか。

革命の際の動員メカニズムを詳細に調査した研究は管見の限りまだなく、筆者の短期間の現地滞在でも十分な調査はできなかった。しかし、2002年のアクス事件に関するラドニツの研究<sup>27</sup>が示唆に富む手がかりを与えてくれる。それによれば、アクス事件前後のデモには、ベクナザロフの隣人・親類・助手たちを核として、そのまた隣人・親類たちが連帯感やのけ者にされたくない意識から参加し、さらにニュースを聞いて義憤を感じた人々が加わった。組織としては、ベクナザロフ擁護委員会を中心に、村やその下部単位ごとに代表者が置かれ、バザールなどでの私的な情報交換とあわせ、かなり整然と指令や情報が行きわたるようになっていた。こうしたネットワークの基盤には村に対する人々の強い帰属意識があり、特に村の下部単位の長として無給で行政的な仕事をしているジュズバシュ（百人長）たちが、デモの組織のうえでも大きな役割を果たしたという。署名運動、ハンスト、人質としての役人の拘束、道路の封鎖、一部での投石・放火といった戦術は、アクス事件と2005年の革命に共通しており、それを支えた郡や村での動員メカニズムの面でも、両事件にはある程度の共通性があったと推測できる。

ただし、2005年の革命の際には、場所によっては地域の団結よりも地域内の対立が前面に出ており、同じ地域に利害の相反する複数のネットワークが存在したと考えられる。また、アクス事

<sup>25</sup> Pavlovskii, ed., *Kirgizskii perevorot*, p. 68.

<sup>26</sup> ジャララバードに1年以上住んだ経験を持つペルクマンズは、ジャララバード市での抗議行動に参加した者の多くは服装から見て農村出身であり、同市の市民は受動的だったと述べている。Mathijs Pelkmans, "On Transition and Revolution in Kyrgyzstan," *Focaal—European Journal of Anthropology* 46 (2005), pp. 153, 156 (n.14).

<sup>27</sup> Scott Radnitz, "Networks, Localism and Mobilization in Aksy, Kyrgyzstan," *Central Asian Survey* 24:4 (2005), pp. 405–424.

件と特に明確に異なるのは、金銭が広範に介在していた点である。現地では、金や食事、ウォッカが配られていた、首都や拠点都市に行くための車も無償で提供されていたという話がよく聞かれる。一部ではこれが革命後も常態化し、金をもらって集会に出ることを半ば職業にしている女性たちがいるという。その背景にあるのは、一方には政治的目的のために金を配れる富者がおり、他方にはわずかな金でも長時間集会に参加しようという貧者がいるという状態である。しかし同時に、集会参加者は一定の地域ごとに動員され、地縁と金とが組み合わさっていた。

こうした事態は、アカエフ時代の市場経済化政策と深く関係している。コチコルをフィールドとする人類学者、吉田世津子は、他の中央アジア諸国よりもはるかにドラスティックに独立自営農化が進められたクルグズスタンでは、親族ネットワークによる相互扶助がソフホーズ解体の受け皿として機能したと述べる。だが自営農化の結果ますます貧窮化が進むと、各世帯は個別のサバイバルに計算感覚を集中させることになり、親族ネットワークは不活性化の兆しを見せていること、しかしそれとは別の次元で、政治経済的利益に関わる人的ネットワークが存在することを指摘する<sup>28</sup>。また世界銀行のある報告書は、贈り物を買えないために儀礼に参加することができず、親族などの社会ネットワークから疎外された貧者が、富者とのパトロン・クライアント・ネットワークに組み入れられつつあると述べる<sup>29</sup>。状況は地域によって相当異なるであろうが、市場経済化で旧来のネットワークの有効性が低下し、新たなネットワーク形成が模索される中で、選挙の候補者やその後援者が現金を投入し、あるいは明るい未来を約束して期待を高めることによって、大規模な動員網が形成されたと考えられる。

強調すべきは、こうした動員の基本的な単位は郡や選挙区レベルだということである。そう考えれば、しばしば言われるような「クルグズスタン南部と北部の対立」という単純な構図で革命が進行したわけではないことがよく理解できる。確かに感情のレベルでは、南部人と北部人が相互に違和感を持っていることは否定できないが、革命につながる動きはコチコル、トン、ビンケク、タラスなど北部でも現れたし、南部でも運動が盛んなウズゲン、アクス、カラスー、アラヴァン、アライ、バザルコルゴンなどの郡とそれ以外の郡では温度差があった。そもそも選挙区内での候補者間の対立は、基本的に地元の人同士の、必ずしも政治信条に基づかない対立であり、彼らが南部・北部という枠を媒介することなく中央のリーダーと結びつくことによって、全国的な運動の中での地位を獲得したのである。たとえばコチコルのジャパロフは、アカエフ時代には中道派であったが、南部出身の反対派リーダーであるバキエフに接近して革命に参加し、新政権での地位を得ている。

---

<sup>28</sup> 吉田世津子『中央アジア農村の親族ネットワーク：クルグズスタン・経済移行の人類学的研究』風響社、2004年（特に307-315頁）。

<sup>29</sup> Kathleen Kuenhast and Nora Dudwick, *Better a Hundred Friends Than a Hundred Rubles? Social Networks in Transition—The Kyrgyz Republic* (Washington, D.C.: The World Bank, 2004). なお、この報告書が言うパトロン・クライアント関係とは、富者から借りた金を返せなくなった貧者が、借金額相当以上の仕事をさせられるという、半ば奴隷的な関係である。

もちろん、集会参加者は金だけを目当てに運動していたわけではない。ジャララバードで3月4日から連日続いた抗議行動・集会では、当初は人々の相互扶助が頼りで飢えに近い状態があったが、後半になってバヤマン・エルキンバエフ（後述）ら富裕者が食事を提供するようになったという<sup>30</sup>。信念を持って参加する人々が中核にいたからこそ運動が持続したことは確かである。カーニバル的な一時的盛り上がりや一定の暴力性というニュアンスも含みつつ、3月の一連の動きを「民衆革命」と呼ぶことは十分可能だと思われる。

他方、候補者たちの側に注目するなら、彼らの革命運動は選挙運動の延長線上にあり、1人で20万ドルぐらい使って有権者の買収などを行うケースが多くあったらしい<sup>31</sup>。アカエフ政権下での国会の政治的な力は決して強くなかったにもかかわらず、彼らがそこまでして当選したがった動機は何だろうか。候補者の中にはビジネスに携わる人が少なからずおり、彼らはビジネスでの成功に飽きたらず政治家として名声を得たいと考えたり、議員になることによって不逮捕特権を得て経済犯罪の摘発から免れたい、経済活動を監督する行政機関への影響力を得たいと思っていたといわれる<sup>32</sup>。ここでも、民間セクターの力が強まりながらもその活動のかなりの部分が非合法の世界にあるという、市場経済化の歪んだ姿が背景に見られる。

また、選挙制度の問題もある。従来国会選挙では小選挙区制と比例代表制が併用されていたが、今回は2003年の憲法改正に基づいて小選挙区のみになり、選挙戦がすべて地域ごとに争われるようになった。また二院制から一院制になり<sup>33</sup>、議員の総定数も105から75に減り、議席を確保するために前職同士が熾烈な争いをする選挙区が目立った。

### 3.3 非クルグズ人の疎外

もう一つ注目しておかなければならないのは、運動に参加したのはほとんどがクルグズ人であり、非クルグズ人はやや疎外されていたということである。アカエフ派は、バキエフが最初に立候補しようとした第30選挙区に富裕なウズベク人候補をぶつけ、一面ではウズベク人を利用したが、ウズベク人の比率が最も高いウズゲン市を周辺のクルグズ人農村部と組み合わせるなどしたため、全体的にはウズベク人の候補者は少なかった。付録1から分

<sup>30</sup> ジャララバード州庁での聞き取り（2005年9月26日）。

<sup>31</sup> 大統領付属国際戦略研究所での聞き取り（ビシケク、2005年9月22日）。タラスでは70万ドルを使った候補者もいるという。

<sup>32</sup> 複数の研究者・企業家らからの聞き取り（ビシケク、2005年9月21～22日）。不逮捕特権を目当てに立候補するビジネスマンが多いという問題は、1995年の国会選挙の時から既に指摘されている。Eugene Huskey, "Kyrgyzstan: The Fate of Political Liberalization," in Karen Dawisha and Bruce Parrott, eds., *Conflict, Cleavage, and Change in Central Asia and the Caucasus* (Cambridge: Cambridge University Press, 1997), pp. 263–264.

<sup>33</sup> 旧国会には立法院と人民代表院があった。俗称としては、常設の前者が下院、会期ごとに集まる地域代表の后者が上院と呼ばれることが多かったが、法律の種類によってどちらが先に審議するかが異なるなど、通常の上院・下院とは異質な関係にあった。定員は、1995年に二院制が導入された時は立法院が35人、人民代表院が70人であったが、98年の憲法改正（99年選挙）で立法院が60人、人民代表院が45人となった。

かるように、3月26日時点の選挙結果としては、諸派合わせて69人の当選者のうち、クルグズ人が57人(83%)、ウズベク人が6人(9%)、ロシア人が3人(4%)、その他が3人(4%)で、国民の民族構成(クルグズ人64.9%、ウズベク人13.8%、ロシア人12.5%、その他8.8%。1999年国勢調査<sup>34</sup>)に比べクルグズ人の比率がかなり高くなっている。

革命派は、国会選挙で落選したウズベク人のアルトゥコフを、オシユのクルルタイで州知事に相当する人民評議会議長に選出(のち州知事代行に任命<sup>35</sup>)することによって、南部に多いウズベク人住民の支持を求めた。1990年のオシユ事件以来ウズベク人とクルグズ人の目立った紛争は起きていないものの、両者の間には溝があり、アカエフは民族間関係の調停者としてウズベク人の信頼を得ていた。それにもかかわらず経済の悪化への不満を背景にウズベク人がクルグズ人と一緒に革命に参加したのは、画期的だとする見方もある<sup>36</sup>。しかしアルトゥコフら少数の運動家を除けば、ウズベク人の態度は受動的だったと見るべきだろう。オシユで3月21日にデモ・州庁舎占拠に参加した者のほとんどは、ビデオに映った容姿から見る限り、クルグズ人である。

コロテエヴァとマカロヴァは、ソ連時代後期以降のウズベキスタンについて、現地民の互酬ネットワークが密になるにつれ、そこに入りにくいロシア人など非現地民との社会的な距離が拡大したと指摘する<sup>37</sup>。独立後の中央アジア諸国でも一般に、国の基幹民族(titular nations)以外に対する露骨な差別はあまりないにもかかわらず、基幹民族の人脈が密であるために、それ以外の民族が政治的・社会的に脇役に追いやられるという現象が見られる。革命からの非クルグズ人の疎外も、その文脈で理解することができる。

#### 4. 新政権の困難な歩み

政治学的には、革命は政治体制の根本的な変革として理解されることが多い。その視点から、革命派および新政権の性格が旧政権とどの程度異なるのかを検討してみたい。

##### 4.1 革命派・新政権内部の多様性

アカエフ時代の反対派活動はそれなりに長い歴史を持つが、活動家たちの連携は体制派エリートとの結束と同様に弱く、政党も有名な政治家一人につき一党が結成されるというに近い状態であった。クロフのアル・ナムス党、テケバエフのアタ・メケン党、トプチュベク・トゥルグナリエフ

<sup>34</sup> Natsional'nyi statisticheskii komitet Kyrgyzskoi Respubliki, "Itogi Pervoi natsional'noi perepisi naseleniia Kyrgyzskoi Respubliki 1999 goda" [<http://www.stat.kg/Rus/Home/census.pdf>].

<sup>35</sup> アルトゥコフは2005年12月に州知事代行の職を解かれた後、バキエフの政策を強く批判している。

<sup>36</sup> ウズベク人ジャーナリストからの聞き取り(オシユ、2005年9月25日)。

<sup>37</sup> Victoria Koroteyeva and Ekaterina Makarova, "Money and Social Connections in the Soviet and Post-Soviet Uzbek City," *Central Asian Survey* 17:4 (1998), p. 588.

のエルキンディク党などである<sup>38</sup>。元々別の人々が率いていたアサバ党も、2002年10月にベクナザロフが党首に就任すると、彼の党としての性格を強めた。

アカエフ政権の末期には反対派を広く結集する動きが現れたが、その際にリーダーに選ばれたのは、比較的最近政権側から反対派に転向した政治家たちだった。最も重要な例は、2004年9月22日に9つの反対派政党・運動が作った「クルグズスタン人民運動」というブロックであり、バキエフが議長となった<sup>39</sup>。12月9日にはオトゥンバエヴァ、テケバエフ、アダハン・マドゥマロフらがアタ・ジュルト運動を作り、オトゥンバエヴァが議長に選ばれた。この2つの運動の間にも連携が生まれ、いわば統一戦線が形成された。

国会選挙と革命運動には、過去数年間に生じた政治家たちの複雑な合従連衡が反映された。かつて中間派的であったクルグズスタン社会民主党のリーダーのうち、アルマズベク・アタムバエフとジャパロフは反対派として行動したが、アブドゥガヌ・エルケバエフ（旧国会の立法院議長）はアカエフ派として選挙を戦った。彼の競争相手は、アディレト党の元リーダーの一人で反対派に転向したマラト・スルタノフだった。ちなみに同じ第44選挙区には反対派のイスマイル・イサクフ（現国防相）も立候補しており、反対派の間でも候補者の絞り込みはできていなかった。

反対派はアカエフ打倒という目標のためにはよく団結していたが、逆に言えばそれ以外の目標や価値観を共有してはいなかった。アル・ナムス党のエミル・アリエフ副議長によれば、2005年10月の大統領選でバキエフを当選させ、クロフを首相にするというタンデムが2003年末から計画されていたというが<sup>40</sup>、具体的な政策についての話し合いが進んでいた形跡は見出しがたい。「クルグズスタン人民運動」もアタ・ジュルトも、革命後には急速にまとまりを失ってしまった。

新政権には、民主主義についても経済政策についても外交についても、さまざまな考えの人々が入った。バキエフはソ連時代に工場長や共産党市委員会第一書記を務め、クルグズスタン独立後は郡や州の行政官を経て首相になった、どちらかといえば古いタイプの政治家であり<sup>41</sup>、民主主義を第一に唱える人々とは若干の距離感がある。クロフは民主派からの評価がより高いが、「鉄のフェリクス」というあだ名が示すように、彼の一般国民からの人気は、民主主義者という以上に、

---

<sup>38</sup> アカエフ時代の諸政党に関する情報としては、やや古い以下のものがある。T. R. Ibraimov, G. T. Iskakova, *Politicheskie partii Kyrgyzstana: Spravochnik* (Bishkek: NPO “Razvitie Gumanitarnogo Prostranstva,” 2000); Abzhalbek Anarbekov, *Politicheskie partii v Kyrgyzstane (1991–1999 gg.)* (Bishkek, 1999).

<sup>39</sup> バキエフが反対派のリーダー、つまり将来の大統領候補に選ばれた理由に関して、革命後に大統領府長官となったストゥコフは、大統領になるには全国2200の投票区に自派のチームを作って報酬を与えるための資金を持っていなければならないとし、自分たちは1995年にマサリエフ、2000年にテケバエフを大統領候補に推したが資金不足で敗北した経験に学んだのだと述べて、バキエフが金持ちであることが重要なファクターだったことを認めている。“Usen Sydykov: Ne boius’ uiti v otstavku,” *AKIpress*, 17.03.2006 [<http://kg.akipress.org/news/26711>].

<sup>40</sup> *Litsa*, 16.08.2005, pp. 4–5.

<sup>41</sup> 年齢的にも、バキエフはアカエフより5歳若いだけである。アカエフがシェヴァルドナゼやクチマより若かったということもあるが、新大統領が前任者より40歳若いグルジア、16歳若いウクライナに比べると差が小さい。大統領側近や閣僚も含め、クルグズスタンでは革命による指導者層の世代交代はあまり進まなかったと言える。



内務省出身で毅然とした剛腕の政治家というイメージによるところが大きい。ウソン・ストゥコフ大統領府長官（2006年5月辞任）は、1990年のオシュ事件当時の共産党オシュ州委員会第一書記で、紛争を止めるどころか煽ったという疑惑があり、陰謀家というイメージが定着している。ダスタン・サルグロフ国家書記（同）はテングリ（天）信仰（テュルク系遊牧民の伝統的世界観を再解釈したもの）を宣伝している人で、西洋型の市場経済や民主主義には批判的である<sup>42</sup>。

## 4.2 政権確立の遅さと人事の不透明性

新政権の基本方針や性格がはっきりしない理由の一つは、そもそも新政権の確立のペースが驚くほど遅く、実績がなかなか現れなかったことである。大統領選挙は憲法上許される範囲で最も遅い期日である2005年7月10日に実施され、就任式も同様に期日ぎりぎりの8月14日に行われ、一刻も早く革命政権を確立させようという姿勢は全く見えなかった。正式の大統領に就任したバキエフがまず熱心に取り組もうとしたのは、政治の大原則に関わる問題よりは、技術的な意味での行政改革であった。特に、2007年までに州を廃止すると言明した<sup>43</sup>。しかし、その後具体的な議論は進んでいない。

また、省庁の再編にも取り組んだが、これを国会で議論するのに若干の時間を要したため正式の閣僚をなかなか任命できず、クロフ首相（9月1日承認）以外の閣僚候補が国会での承認投票にかけられたのは9月27日のことであった。投票の結果、革命の先頭に立っていたオトゥンバエヴァ（外相候補）、カドゥルベコフ（運輸通信相候補）ら6人は承認を得られなかった<sup>44</sup>。「クルグズスタン人民運動」副議長として革命時にバキエフを支え、その後副首相代行を務めていたイシエングル・ボルジュロヴァは、バキエフの提案したリストにも入っていなかった（彼女は10月にクルグズ国立大学学長代行となったのち、2006年5～6月に再び副首相代行）。その後バキエフは別の候補らを提示して承認を得たが<sup>45</sup>、結果的に国会議員と同様、大臣も男性ばかりとなった（閣僚としては、移民・雇用問題国家委員会の議長が女性である）。また、閣僚の民族帰属については正確な資料がないが、姓名と顔立ちから判断する限り、エヴゲニー・セメネンコ労働社会保障大臣以外は全員クルグズ人だと思われる。

何人かの閣僚候補が承認を得られなかった一因は、革命派が不正を追及したはずの選挙によって成立した国会が存続し、政権と必ずしも方針を共有していないという構造的問題にある。ただ、最終的に任命された閣僚の経歴（付録2）を見ると、バキエフ側の人選自体に革命の論功行賞としての性格が薄く、アカエフ政権時代のエリートからの連続性が強く現れていたことが分かる。

<sup>42</sup> Dastan Sarygulov, *XXI vek v sud'be kochevnikov* (Bishkek, 2001).

<sup>43</sup> “K. Bakiev: k 2007 g. budet zavershen protsess uprazhdeniia oblastei,” *AKIpress*, 30.08.2005 [<http://kg.akipress.org/news/21852>].

<sup>44</sup> “Parlament utverdil 10 ministrov, ostal'nye 6 ne utverzhdeny,” *AKIpress*, 27.09.2005 [<http://kg.akipress.org/news/22476>].

<sup>45</sup> 第一副首相の人事は長い間もめ続け、第一副首相代行を務めていた銀行家で旧反対派のダニヤル・ウソノフを任命するという案が撤回されたのち、メドトベク・ケリムクロフの任命が国会承認されたのは12月2日のことであった。

閣僚 19 人のうち、アカエフ政権末期に反対派に属していたのはクロフ首相、マドゥマロフ副首相、イサコフ国防相、ドスボル・ヌルウール教育・科学・青年政策相、アタムバエフ産業・通商・観光相（2006 年 4 月辞任）の 5 人だけであった（国会選挙の際に革命運動に参加した者としては、上述のジャパロフ財務相も入る）。

他の閣僚の多くは、アカエフ政権末期にも行政府・司法府やその関連機関で働いていた人々で、目立つところでは大統領府副長官だったアrikベク・ジェクシエンクロフ外相、農業・水利・工業省の局長だったアブディマリク・アナルバエフ農業・水利・加工工業相、憲法裁判所判事だったマラト・カユポフ法相、国有財産基金の長だったトゥルスン・トゥルドウマンベトフ国有財産管理国家委員会議長がいる。特に、ムラト・スタリノフ内務相は革命前日の 3 月 23 日にアカエフによって検事総長代行に任命され、バキエフを権力篡奪未遂の罪で起訴する準備を始めた人物である<sup>46</sup>。もちろんこれは彼らが現在もアカエフ派であることを意味するわけではなく、実務能力を買われての登用であろうが、大統領が誰であろうと体制派であり続けようとする人々を集めたという意味では、革命政府として奇妙だという印象が拭えない。また、旧反対派として位置づけられる閣僚も、多くはアカエフ政権末期に議員や企業家であった人々であり、不遇をかこっていたのは、投獄されていたクロフだけである。なお、バキエフやスドゥコフを含め、政権指導部にはソ連時代から共産党やコムソモール（共産主義青年同盟）など各界で出世コースを歩んでいた人が多く、ソ連時代のエリート層との連続性も現れている。

閣僚以外の要職に就いた旧反対派の著名な人物としては、テケバエフ国会議長（2006 年 2 月辞任）や、ザミラ・スドゥコヴァ駐米大使（元ジャーナリスト）、リナ・プリジヴォイト駐オーストリア大使（同）らがいるが、いずれも行政的な権力からやや外れた地位であり、特にジャーナリストを大使に任じたのは、彼女らが再び政権批判の筆をふるう可能性を封じたようにも見える。

その他の人事においては、バキエフの弟が駐独大使に任命されるなど、アカエフ時代と同様のネポティズム（親族登用）と見られかねない例がいくつか現れる。バキエフの次男マクシムには、後述のルスベク（ルスペク）・アクマトバエフと親しいなど黒い噂があり、かつてのアイダル・アカエフになぞらえられることも多い<sup>47</sup>。

前政権下の腐敗体質は、現政権下でも残っているとの見方が強い。アクス事件以来の活躍から「革命の父」ともいわれるベクナザロフは、革命後検事総長として汚職追及の急先鋒に立っていたが、2005 年 9 月 19 日に不透明な事情のもと解任された。しかしそのベクナザロフにさえ、一部の人間の汚職を見逃してやる代わりに金を取っているのではないかという噂があった。これが真実か否かは分からないが、こうした噂が流れやすいことは、人々の意識の中で官職と汚職が深く結びついていること、また政敵の足を引っばる時に汚職の噂を流すという手段がよく使われることを示している。

---

<sup>46</sup> *RFE/RL Newslines*, 24.03.2005.

<sup>47</sup> “Edil’ Baisalov: ‘Ja emu skazal, chto v etom vinovat on, Bakiev!’,” *AKIpress*, 06.10.2005 [<http://kg.akipress.org/news/22657>].

### 4.3 議員暗殺と犯罪分子の台頭

新政権にさらに暗い影を落としているのは、議員の暗殺が相次いでいることである。2005年6月10日の白昼、革命時にアカエフ派の白帽軍団を組織したといわれるスラバルディエフ議員が、ビシケク都心で射殺された。9月21日夜には、南部の革命派の集会に資金面・輸送面で多大の貢献をしたとされるエルキンバエフ議員が、やはりビシケクで射殺された。いずれも背景は十分に明らかになっていない。2人とも犯罪組織とのつながりが噂されていたため非政治的な理由で殺された可能性もあるが、エルキンバエフの場合、一時南部で絶大な人気を誇り大統領選に立候補したものの、恐らくはバキエフ側の圧力で取り下げたという経緯があり、政治的な背景が疑われている。

10月20日には、トゥヌチュベク・アクマトバエフ議員が監獄の視察中に囚人に射殺された。国会の国防・安全保障・法秩序・情報政策委員会委員長という地位にあった彼は、実はイッシク・クリ州出身の有名なやくざ、ルスベク・アクマトバエフの弟であり、そしてこの監獄ではルスベクの仇敵であるチェチェン人ややくざ、アジズ・バトゥカエフが服役していた。監獄で騒ぎが起きているという知らせを聞いて、クロフはバキエフの指示のもと現地に行ったが、結局は死者・負傷者を運び出すことしかできなかった（しかもトゥヌチュベクの遺体は輸送中にルスベクらにさらわれ、検屍できなかった）。すると、ルスベクらは殺人を仕組んだのはクロフだと決めつけ、クロフ辞任を求める集会を連日開いた。集会は規律正しく行われたものの、やくざ風の男たちが都心の広場を占拠する事態は、ビシケク市民を恐怖に陥れた。

この事件が示す闇は深い。既に8月にアクマトバエフ兄弟が主催した、英雄叙事詩の主人公エル・タブルドゥを記念する祭には、マドゥマロフ、ヌルウール（いずれも当時大臣代行）、エルキン・アルムベコフ国会副議長らが参加し<sup>48</sup>、ルスベクと政権中枢との関係が疑われていた。クロフ辞任要求集会が始まると、議員や大臣たちが遺族見舞いと称して、広場にいるルスベクに次々と挨拶に行った。さらに衝撃的だったのは、ペレストロイカ期以来一貫して民主化運動の闘士として活動してきたトゥルグナリエフが、この集会の指導者の一人となったことである。実は、彼の娘の一人はトゥヌチュベクの妻だった。まもなくクロフを支持する集会も始まったが、そこではアカエフ時代にトゥルグナリエフを補佐・救援していた人権活動家アジザ・アブドゥラスロヴァが、かつて彼にかけられていたアカエフ暗殺未遂の容疑は、冤罪ではなく十分根拠のあるものだったと発言し<sup>49</sup>、旧反対派の分裂の深刻さを印象づけた。

この間バキエフはほとんど発言せず、多忙を理由に国会にも行かなかった。これは、6月17日のバルクタバソフ派事件<sup>50</sup>の際に見せた毅然とした対応や、エルキンバエフ暗殺の後にすぐ国会で

<sup>48</sup> “Brat’ia Akmatbaevy provodiat torzhestva, posviashchennye natsional’nomu geroiu Er-Tabyldy,” *AKIpress*, 23.08.2005 [<http://kg.akipress.org/news/21691>].

<sup>49</sup> “Aziza Abdrasulova: ‘Turgunaliev gotovil pokushenie na zhizn’ Askara Akaeva,’” *Gazeta.Kg*, 04.11.2005 [<http://www.analitikk.org/politics/2005/11/04/2627.htm>]. (2006年5月1日閲覧)

<sup>50</sup> カザフスタンとの二重国籍を持っていることを理由に大統領候補としての登録を拒否されたウルマト・バルクタバソフの支持者たちが、大統領府・政府庁舎を襲撃・侵入した事件。なおバルクタバソフ

演説したことを想起すれば、奇妙な態度だった。一方クロフは、この混乱のさなかにモスクワに行って上海協力機構の首相会議に出席して外交での初舞台を飾り、危機に動じない姿を見せつけた。結局、10月27日にバキエフが大統領府でルスベク派集会の代表者たちと会ったあと集会は終了し、クロフは地位を保った。しかしバキエフがルスベクを使ってクロフに圧力をかけようとしたのではないか、そもそも革命の際にバキエフらはルスベクの援助を受けて借りがあるのではないかという疑いは残った。

清廉潔白なイメージのあるクロフだが、投獄中にバトゥカエフと懇意にしていたという噂もある（クロフは否定）。なお、件の監獄では射殺事件後しばらく混乱が続いたのち、当局が武力で収拾したが、その際、バトゥカエフが16の部屋を占有して妻らと同居し、彼のために計18頭の馬や山羊が飼われていたことが判明し<sup>51</sup>、監獄の管理態勢の腐敗ぶりも明らかになった。

犯罪分子の問題は、2006年に入ると再び政治危機を引き起こした。国民保安部（SNB。旧 KGB）の組織犯罪取締課長が武器の不法所持で逮捕された事件に関連して、クロフが1月25日に、犯罪分子と政権の癒着を憂える声明を発表し、ルスベクとタシュテミル・アイトバエフ国民保安部長官らを非難したのである<sup>52</sup>。国会も国民保安部の責任を激しく追及した。すると、バキエフはアイトバエフ解任を拒否したうえ、2月3日の国会演説で、国会と首相による追及を「ショー」と呼び、特にオムルベク・テケバエフ国会議長が政府・大統領との対立の道を選んだとして非難した<sup>53</sup>。これに対しテケバエフは7日に国会で「[バキエフは] 恥さらしになった、犬になった。男なら首をつるがいい」と暴言を吐き<sup>54</sup>、曲折を経て27日に国会議長を辞任した。後任には、バキエフに比較的立場に近いマラト・スルタノフが就任した。この一連の動きの背景には、バキエフとクロフの権限争い、内務省（クロフ系）と国民保安部（バキエフ系）の対立、今後大統領制を保つか議会制に移行するかをめぐる議論（後述）、バキエフとテケバエフの積年の感情的対立といった多様な問題がある。つまり、政治家の個人的な対立と、さまざまな政治機構・行政機構の対立が入り乱れているのである。

さて、ルスベク・アクマトバエフは、弟の議席を引き継ぐべく国会の補選に立候補した。各方面からの懸念が高まる中、クロフと内務省、NGOの要請に基づき、中央選管は2006年3月30日に、犯罪歴などを理由にルスベクの候補者登録を抹消した。翌31日、ルスベクは数百人の支持者を引き連れて大統領府・政府庁舎前で再びクロフ辞任を要求する集会を開いた。するとバキエフがアイトバエフと共に広場に現れ、決定を裁判所に委ねるよう呼びかけた（バキエフは後に、

---

フは、アルガ・クルグズスタン党と同系統といわれる「メケニム・クルグズスタン（わが故郷クルグズスタン）」運動のリーダーであった。

<sup>51</sup> “Zakliuchennyi A. Batukaev zhil v 16-komnatnykh apartamentakh i imel podsobnoe khoziaistvo,” *AKIpress*, 01.11.2005 [<http://kg.akipress.org/news/23252>].

<sup>52</sup> “Feliks Kulov sdelał zaiavlenie o razgule prestupnosti v strane,” *AKIpress*, 25.01.2006 [<http://kg.akipress.org/news/25323>].

<sup>53</sup> “Vystuplenie Prezidenta KR K. Bakieva na zasedanii Zhogorku Kenesha (polnyi tekst),” *AKIpress*, 03.02.2006 [<http://kg.akipress.org/news/25681>].

<sup>54</sup> “Pereshli na lichnosti: Spiker kirgizskogo parlamenta ukhodit v otstavku iz-za davnei nepriiazni k prezidentu strany,” *Ferghana.Ru*, 08.02.2006 [<http://news.ferghana.ru/detail.php?id=4227>].

閣僚たちはなぜ集会参加者と対話しなかったのかと非難した)。地区裁判所と最高裁判所の決定によりルスベクは候補者登録を回復し、4月9日の投票で79%の票を得たが、中央選管は彼を議員として登録しなかった。犯罪者が議員になる可能性についてはロシアやアメリカも懸念を示し<sup>55</sup>、国際問題に発展したが、5月10日にルスベクはビンケク郊外で何者かによって射殺され、彼をめぐる騒動はあっけない幕切れを迎えた。殺害の犯人や背景については分かっていない。

#### 4.4 憲法改正問題をめぐる方針の揺れ

ところで、アカエフ政権の問題の根幹はクルグズスタンの政治制度にあるとして、憲法を根本的に改正しようという動きは革命直後から存在した。2005年4月25日には「権威主義的システムの解体」のための憲法改正を目的として、各界の代表からなる憲法評議会が設置された。そこでは大統領制の廃止も提案されたが、5月末には大統領制を維持しながら三権の関係の調整や人権保護の向上を図る最初の改憲草案が作成された。その後さらに議論が重ねられたものの、作業は次第に遅滞した。10月20日には最終案作成に向けた編集グループが憲法評議会内に設けられたが、この段階になっても大統領制か議院内閣制かという根本的問題で意見が一致しなかった<sup>56</sup>。

バキエフは一時は2010年まで憲法を改正する必要はないとも発言したが、大統領府は結局、憲法評議会は諮問機関に過ぎないとして部内で案を作成し、これをバキエフが11月14日付で国民に向けて発表した。元大統領の特権の大幅削減、国会選挙での比例代表制併用の復活などが目立ち、また首相の権限の微妙な拡大や人権保護規定の改善も見られるが、大筋としては現行憲法を抜本的に変えるものではない。またこの案は、5～6月段階の草案とも根本的に異なるものではなかったが、憲法裁判所の廃止を盛り込んだことなどで民主派の強い反対を受けた。するとバキエフは間もなく、憲法裁判所を廃止する必要はないと申し、12月21日の憲法評議会の会合では、大統領制、大統領・議会制、議会制のどれを選ぶかについて2006年に国民投票を行うと約束して、それまでの憲法改正案は宙に浮いた形になった（その後、国民投票は行わない可能性があると発言）<sup>57</sup>。このように方針が時によって変わるの、バキエフの意志の弱さの現れなのか、攪乱しつつ自分の権力を強めようとしているのか（将来的に首相職を廃止すべきだという発言も時々行っている）、判然としない。

---

<sup>55</sup> “Rossiia nadeet’sia, chto Kyrgyzstan ne dopustit kriminal vo vlast’,” *AKIpress*, 04.04.2006 [<http://kg.akipress.org/news/27082>]; “R. Baucher: Voprosy prikhoda v politiku prestupnogo mira dolzhny reshat’sia v politicheskikh krugakh,” *AKIpress*, 11.04.2006 [<http://kg.akipress.org/news/27289>].

<sup>56</sup> 憲法評議会についての資料や憲法改正問題に関する2006年初めまでのニュースは、AKIpressのサイト内に特設されたコーナー [[http://kg.akipress.org/\\_htm/cs.php](http://kg.akipress.org/_htm/cs.php)] で見ることができる。

<sup>57</sup> バキエフは2006年3月27日にベクナザロフを座長とする作業グループを作って、大統領制、大統領・議会制、議会制それぞれの制度に合わせた憲法草案を作るよう命じ、ベクナザロフは6月22日に草案を大統領に提出した。バキエフらが推す大統領制の案では、現行憲法に比べても大統領に著しく権力を集中させることになっているようである。“Uchastniki seminaru po formam pravleniia sdelali vyvod, chto v trekh variantakh Konstitutsii, predlozhennykh A. Beknazarovym, preobladaiut prezidentskie polnomochiia,” *AKIpress*, 15.07.2006 [<http://kg.akipress.org/news/29777>].

なお、トゥルグナリエフらは革命直前の国会選挙は無効だったとして、国会の解散を問う国民投票の実施を求める署名活動を展開した。この署名を地方行政が積極的に援助していたという説（テケバエフの発言<sup>58</sup>）もあり、バキエフ派が国会の解散を狙っているのではないかという見方がクルグズスタン政治の先行きをさらに不透明にしていた。2005年11月の段階でトゥルグナリエフは、国民投票の実施に必要な30万人の署名を集めたと言っていたが、中央選管は06年1月17日、実際は10万人の署名（圧倒的多数はジャララバード、オシュ両州でのもの）しかなかったと発表した<sup>59</sup>。しかしその後の反バキエフ派議員の活発化に対抗して、5月20日にトゥルグナリエフ、スドゥコフらがジャララバードで国会解散を求めるクルルタイを開くなど、国会への圧力はさまざまな形で続いている。

#### 4.5 革命1周年とバキエフ批判大集会：南北の温度差

新政権の混乱が続く中、国民の間での革命と新政権の評価は割れている。2005年11月にM-Vector社が全国で1000人を対象に行った調査によれば、72%が「政権が交代したのは良いことだ」と答えたが、新政権については「完全に満足」が12.7%、「どちらかといえば満足」が41%であった。オシュ州とジャララバード州で満足度が高く、チュイ州で不満度が高かったという（具体的な数字は不明）。また、バキエフを「無条件で信頼」するのは44%であった（農村部で支持が高かったという）。「今後12カ月はクルグズスタンにとって良い時期になる」と答えたのは52.7%であったが、農村部で60.4%、都市部で37.4%と開きが出た<sup>60</sup>。

また、2005年12月3～8日にSotsinformbiuro社がビシケクで1011人を対象に行った調査によれば、39.8%が「2005年は悪い年」、17.5%が「どちらかといえば悪い年」と答えた。特に女性、ロシア人、高等・中等専門教育修了者で不満度が高かったという。3月24日の事件については、16.8%が国の発展にとって肯定的な事件であると答え、47.3%が否定的な事件と答えた<sup>61</sup>。いずれの調査についても、メディアを通して発表された数字・情報しかないため、細かなデータは不明であるが、南部・農村部で革命と新政権への評価が高く、北部・都市部で低い傾向が見取れる。

革命1周年が近づくと、オシュのあるグループは、3月24日の事件を「大三月革命」と呼び、オシュの中央広場にその名を付け、革命参加者にアフガン戦争従軍者等と同じ地位を与えるよう

<sup>58</sup> “Spiker ZhK KR: T. Turgunaliyevu v sbore golosov za rospusk parlamenta pomogaiut mestnye organy vlasti,” *AKIpress*, 30.11.2005 [<http://kg.akipress.org/news/23915>].

<sup>59</sup> “TsIK: T. Turgunaliyev ne smog sobrat’ 300 tys. podpisov dlia rospuska parlamenta,” *AKIpress*, 17.01.2006 [<http://kg.akipress.org/news/25024>].

<sup>60</sup> “72% kyrgyzstantsev ukazali o svoei podderzhke smeny predydushchei vlasti v strane, no tol’ko 12,7% polnost’iu udovletvoreny nyneshnei vlast’iu,” *AKIpress*, 28.12.2005 [<http://kg.akipress.org/news/24657>].

<sup>61</sup> “47,3% bishkekchan schitaiut, chto 2005 god dlia strany byl plokhim,” *AKIpress*, 28.12.2005 [<http://kg.akipress.org/news/24646>].

要求した<sup>62</sup>。大統領令により、3月24日は「人民革命の日」と名づけられ（ただし国会は法律による祝日制定を拒否）、当日はページェントや軍事パレードなどが行われた。南部では自主的な祝賀の動きも多数見られたが、AKIpressサイトの掲示板への書き込み（書き手はビシケク市民が中心と思われる）では、略奪が横行した悲しむべき日との声が圧倒的多数を占めた。

4月に入ると、犯罪分子に対するバキエフの無為を批判し、憲法改正を含む改革を迅速に行うよう求める声が高まった。テケバエフ、アタムバエフ、アルトゥコフ、テミル・サリエフ議員、クバトベク・バイボロフ議員らの呼びかけで、4月29日に大雨のビシケク都心でデモ・集会が行われた。参加者は内務省発表で1万5千～1万7千人と、革命時に匹敵する数に達した。バキエフやビシケク市長、バキエフ派の団体などは事前に、集会が混乱を招く可能性を指摘して逆に不安を煽ったが、集会は整然と行われ、警察も、女性警官がデモ隊に花を渡して和やかさを演出しながら秩序維持にあたった。そして、バキエフとクロフが広場に現れ、集会の趣旨を支持するという短い演説を行った。政治に関心のある大勢の市民が、全く混乱を伴わずに、変革の必要性をアピールしたという意味で、この集会は画期的な出来事であった。

アタムバエフは、アカエフ的な政治スタイルを断ち切ることをバキエフに要求する意味で、戦略的に「アカエフよ去れ」というスローガンを掲げたが、客観的に見ても、バキエフより一貫してアカエフ批判の活動をしていたテケバエフらが先頭に立ったこの集会は、反アカエフ運動と革命の延長線上に位置づけることができる。ただしこの集会の参加者は、南部の住民が多く駆けつけた革命時の集会とは対照的に、ビシケク市、チュイ州、タラス州の住民が主だったようである（サリエフやアタムバエフが自分の地元から動員した人々を含む<sup>63</sup>。ビシケクでの集会に先立ち、ナルンやタラスでも同じ趣旨の集会が開かれたが、南部での動きは鈍かった。26日にアルトゥコフがオシュで開いた集会には、州当局などの圧力があつたためか、30人足らずしか参加しなかった<sup>64</sup>。前述したように、革命の際はコチコルやトンなど北部の動きも重要な意味を持っていたし、バキエフ批判集会を呼びかけた政治家には南部出身者も少なくないので<sup>65</sup>、いずれの事態も単純な南北対立として見るのは正しくない。しかし、アカエフ打倒には南部がより熱心に動いたのに対し、バキエフ批判には北部がより活発に動くという温度差があることは確かである。

4月29日の集会が掲げた要求には、ストゥコフ大統領府長官、カンバラル・コンガンティエフ検事総長、サルグロフ国家書記、アイトバエフ国民保安部長官の辞任が含まれていた。5月10日、サルグロフは自ら辞任し、ストゥコフとアイトバエフもバキエフによって解任された（人事の詳

<sup>62</sup> “V Oshe predlagaiut priravniat’ uchastnikov martovskikh sobytii 2005 goda k ‘afgantsam’ i ‘batkentsam’,” *AKIpress*, 13.01.2006 [<http://fergana.akipress.org/?id=18025>].

<sup>63</sup> “Nachalos’ dvizhenie kolon v storonu ploshchadi Alattoo dlia uchastiia v mitinge,” *AKIpress*, 29.04.2006 [<http://kg.akipress.org/news/27856>]; “Oppozitsiia ob”iavila o date novogo mitinga – 27 maia,” *AKIpress*, 29.04.2006 [<http://kg.akipress.org/news/27870>].

<sup>64</sup> “Anvar Artykov smog sobrat’ na mirnyi miting 25 chelovek,” *AKIpress*, 26.04.2006 [<http://fergana.akipress.org/?id=18999>].

<sup>65</sup> ただし政権に批判的な南部出身の政治家のうち、ベクナザロフや共産主義者党のイスハク・マサリエフは集会に反対した。彼らは反バキエフであると同じかそれ以上に、反クロフである。

細は付録2の注を参照)。集会の要求が部分的に満たされたことになるが、前述のように国会解散を求める集会も開かれていて、バキエフ派は巻き返しを図っていると見られる。

以上のように、新政権には多くの混乱が見られ、人事面でも政策面でもアカエフ時代と比べて根本的に違う新機軸を打ち出しているとは言えない。概ね自由でありながら不透明な部分の多い政治構造も継続しており、政治体制の根本的な変革という意味での革命は実現していないと考えるべきだろう。民主化という点では、確かにアカエフ政権後期に見られた反対派へのいやがらせや、政府系メディアの偏向報道は新政権になって減ったが、アカエフ政権前期の状態に戻ただけとも言え、「民主化革命」という言葉は使いにくい。

ただ、今後どの程度定着するかどうかは別として、現政権には、アカエフ政権とは異なる性格もある。第一は、アカエフは末期には「裸の王様」化していたとはいえ、一応彼を頂点とするピラミッド型の政治構造がヴァーチャルには存在していたのに対し、現政権はバキエフとクロフの二頭制、ないし他の有力政治家も含めた寡頭制だという点である。第二は、政権の内部にも国民の間にも、革命を実現した以上、もはやアカエフ時代のように民主主義を唱えながら権威主義化を志向するごまかしは許すまいという意識がある点である。この2つが、バキエフが時に見せる権力集中志向を阻んでおり、クルグズスタンでは他の中央アジア諸国やロシアと異なり、権威主義的な強い指導者を求める動きが今のところ優勢にならずに済んでいる。

## 5. 国際関係の中でのクルグズスタン革命

### 5.1 「アメリカ・シナリオ」説批判

クルグズスタンの革命はしばしば、グルジアやウクライナの革命と共に「民主化ドミノ」の一部として位置づけられ、さらにはアメリカのシナリオによって起きたと言われることが多い。そのような見方が妥当なのかを検討しておこう。

革命の動きの背後にアメリカがいるという見方は、アカエフ派が2004年末以来執拗に繰り返してきたものである。政府系紙は、ウクライナの「オレンジ革命」の際、これはアメリカのシナリオによるものだとシユシチェンコを非難する記事を何度も載せた<sup>66</sup>。少数民族の文化センターなどが加盟するクルグズスタン人民総会の理事会（大統領の諮問機関としての地位を持つ）は、アメリカ大使スティーヴン・ヤングの、「クルグズスタンで平和的な政権移譲が行われれば、諸隣国の市民を鼓舞しうる」といった発言を取り上げ、「一時的な客人」である大使が独立国に指示を出すべきではないとする声明を出した<sup>67</sup>。ヤングが2005年2月25日の新聞インタビューで「選挙が民主的に行われなければ国際社会は失望するだろう」と述べると、外務省は2日後にそのよう

<sup>66</sup> *Slovo Kyrgyzstana*, 30.11.2004, 02.12.2004, 03.12.2004, 06.01.2005, 11.01.2005.

<sup>67</sup> *Slovo Kyrgyzstana*, 21.12.2004.



な「内政干渉の試み」は許されないとする強い調子の覚書を送った<sup>68</sup>。革命直前の3月19日には、ヤング大使の2004年12月30日付秘密報告書と称する怪文書が、国営通信社「カバル」のウェブサイトに掲載された。アカエフを中傷する情報を流し反対派に多額の援助を与えるべきだと（相手の名は書いていないが恐らく本国政府に）提案する内容だが、稚拙な英語で書かれた、明らかな偽造文書である<sup>69</sup>。アカエフは辞任後も、革命が起きたのはアメリカのせいだという発言を繰り返している<sup>70</sup>。

ヤング大使の発言にあるように、非民主的な長期政権が続く中央アジアの中で、クルグズスタンが政権交代の前例となることをアメリカが望んでいたのは事実であり、アカエフ派はプレッシャーを感じていたのだろう。早くも2004年3月、アメリカ国務省の招きでワシントンを訪れたバキエフ、テケバエフらに対し、リン・パスコ国務次官補が、クルグズスタンで政権交代が実現されるべきだと発言している<sup>71</sup>。また、革命後にアメリカが政権交代を手放して歓迎したことも、「アメリカ・シナリオ」説を勢いづけている。しかし、反対派の革命行動を直接財政援助したわけではないことは、アメリカ大使館側と旧反対派関係者が一致して証言するところである<sup>72</sup>。確かに反対派やNGOは、アメリカや国際機関の各種セミナーに参加したり、助成を受けたりしており、特に印刷所が助成を受けたことは、反対派が見ばえのよい新聞を出すのに役立った。しかし、革命に参加した田舎の人々が反対派の新聞を直接読む機会は乏しくむしろ口コミが重要であったこと<sup>73</sup>、また彼らを動員する上ではNGOよりも国会選の候補者の力が大きかったことを忘れてはいけない<sup>74</sup>。また、外国の援助漬けになっていたのはアカエフ政権も同じである。アル・ナムス党の幹部はアメリカの要人に、アカエフはアメリカの援助のおかげで選挙に勝てるのだと言ったことがあるという<sup>75</sup>。

また、民主主義や人権の概念を（たとえ表面的な方法にしても）宣伝した点では、欧米の諸組織と並んでアカエフ政権自身の役割が大きい。民主主義と人権は標語としてアカエフ政権が好ん

---

<sup>68</sup> “MID KR obvinilo posla SShA S. Ianga v popytke vmeshatel'stva vo vnutrennie dela strany,” *AKIpress*, 27.02.2005 [http://kg.akipress.org/news/17544].

<sup>69</sup> “Secret Report of the U.S. Ambassador to Kyrgyz Republic” [http://cryptome.org/kyrgyz-secret.htm].

<sup>70</sup> アカエフのウェブサイト [http://www.askarakaev.kg] には、政権転覆にアメリカの諜報機関やNGOが果たした「役割」を非難する、彼自身およびジャーナリストの論説が集められている。

<sup>71</sup> Mekhman Gafarly, “Sezon ‘barkhatnykh revoliutsii’ v SNG: Gosdep SShA initsii ruet ‘smenu vlasti’ v Kirgizii i Kazakhstane,” *Novye Izvestiia*, 11.03.2004 [http://www.newizv.ru/news/?n\_id=5136&curdate=2004-03-11].

<sup>72</sup> アメリカ大使館での聞き取り（ビシケク、2005年10月3日）、「ケルケル」幹部の一人からの聞き取り（ビシケク、2005年9月21日）など。

<sup>73</sup> ラドニツによれば、アクス郡内で新聞が売られているのは中心地のケルベンだけである。Radnitz, “Networks, Localism,” p. 408.

<sup>74</sup> 「アメリカ・シナリオ」説を唱える人々はこれらの点を（故意に？）見落としており、アメリカ側の発言やNGO等に対して行った援助を事細かに記しておきながら、それが革命のための動員にどう結びついたのかについては具体的に語らない。前出の Kniazev, *Gosudarstvennyi perevorot 24 marta*. はそのような著作の例。

<sup>75</sup> アル・ナムス党幹部からの聞き取り（ビシケク、2005年9月21日）。

で使ったものであり、田舎の住民でも民主主義を唱えて自分たちの権利を主張することが当然だという感覚を持つようになっていた。前掲のラドニツの研究では、貧しいアックスの人々がラジオ・リバティを聞き、「正義」「自由」「民主」をよく話題にし、それまでほとんど政治経験がなかったにもかかわらずベクナザロフ擁護運動に立ち上がった姿が活写されているが、外国の論調の影響はあったにしても、それを聞いて独自の行動に結びつける素地が田舎にまで存在したからこそ、革命が可能になったと言えよう。

グルジアやウクライナの運動組織とクルグズスタンの革命派の連絡はほとんどなかったと見られる<sup>76</sup>。人権活動家のエディル・バイサロフがウクライナの選挙監視に行つて「オレンジ革命」に感激して帰ってきた、「バラ革命」で活躍したグルジアのギヴィ・タルガマゼ議員らがクルグズスタンに来て革命派と会ったというようなエピソードはあるが<sup>77</sup>、局所的な現象に過ぎない。運動の形態としても、青年組織の役割が相対的に小さかったこと、首都よりも地方での動きが活発で、それが首都に波及したことなど、グルジアやウクライナの場合とは大きな違いが見られる。

## 5.2 バキエフのロシア・コネクションとナショナリズム

外国の動きの中で注目に値するのはむしろ、バラ革命やオレンジ革命の連鎖に強い警戒心を示しながら、アカエフを特に積極的には支持せず、反対派とも連絡を取っていたロシアの態度である<sup>78</sup>。これについては改めての検討を要するが、ソ連エリート的な経歴を持ち個人的に親ロシア的といわれるバキエフらクルグズスタンの革命派リーダーたちに、ロシアはサアカシュヴィリやユーシチェンコとは違う安心感を持っていたのではないかと思われる。ウクライナへの介入失敗の教訓もあつただろう。

アメリカにしてもロシアにしても、グルジアの場合と違い、アカエフと革命派の仲介には動かなかった。これは、首都での決戦が短く仲介のための時間的余裕が少なかったことが一因だが、3月20日前後に南部が反対派の掌握下に入った時点で、アカエフ政権がこのままの形では維持できない、ノーリターン事態であることは明らかだったはずである。アメリカもロシアも、グルジアに対するほど強い関心を持たず、様子見の態度を取っていたと言ってよい。

革命後、外交方針が決して親米化していないことも、革命がアメリカの意志によって起きたものではないことの傍証である。バキエフ政権は当初、諸大国の間でバランスを取る点でアカエフの外交路線を踏襲した。しかし、アカエフが西側の言いなりになっていたことを批判する声も国内に強く、バキエフは次第に国益重視を掲げるようになり、大統領就任式の演説では「クルグズ

<sup>76</sup> 「ケルケル」幹部の一人からの聞き取り（ビシケク、2005年9月21日）。

<sup>77</sup> Kathy Gannon, "Islamists See Opening in C. Asia Chaos," *Associated Press*, 23.03.2005 [<http://www.bhrg.org/mediaDetails.asp?ArticleID=92>]; Zaal Anjaparidze, "Georgian Advisors Stepping Forward in Bishkek," *Eurasia Daily Monitor*, 25.03.2005 [[http://www.jamestown.org/publications\\_details.php?volume\\_id=407&issue\\_id=3276&article\\_id=2369483](http://www.jamestown.org/publications_details.php?volume_id=407&issue_id=3276&article_id=2369483)].

<sup>78</sup> バキエフは2005年1月25日にモスクワでイーゴリ・イヴァノフ・ロシア安全保障会議書記らと会った。オトゥンバエヴァも2月にモスクワを訪れ、国会議員らに会ったりラジオに出演したりした。Pavlovskii, ed., *Kirgizskii perevorot*, p. 15; *RFE/RL Central Asia Report*, 16.02.2005.

スタンは誰かの地政学的利益を実現させる場所にはならない」と述べた<sup>79</sup>。アメリカに対しては複雑な感情が各層に見られ、国会がオトゥンバエヴァの外相就任を拒否した際にも、彼女が親米的であることはマイナス材料として働いたと見られる。ジェクシエンクロフが外相に就任してからは、外相・外務省はアメリカや OSCE に対して時に高飛車な姿勢を見せている<sup>80</sup>。バキエフはウズベキスタンの米軍追放の動きには追随しなかったものの、米軍による基地使用料の 100 倍近い増額（年 200 万ドルに）を求めており、特に 2006 年 4 月 19 日には、6 月 1 日までに値上げ交渉が妥結しなければ駐留協定を破棄する可能性を留保すると発言した<sup>81</sup>。ナショナリズムに訴えたこのような強硬発言は、バキエフがビシケクでも人気を得ることのできる数少ない手段の一つとなっている。

隣国のカザフスタンやウズベキスタンの政権は、クルグズスタン革命後、欧米の民主化要求への反発をますます強めている。当面は「民主化ドミノ」説とは逆に、CIS 諸国の中ではアメリカや民主主義への態度の分極化が進みつつあり、クルグズスタンはそのはざままで方向を模索しつつある段階だと言えよう。

## おわりに

以上見てきたように、クルグズスタンでの政権交代は、政治エリートのまとまりのなさという弱点を当初から持っていたアカエフ政権が、政治手法の矛盾や家族の悪評によってますます力を失い、選挙時の混乱に対処できなかったこと、選挙の候補者が形成・動員した種々の社会ネットワークが、政権打倒という一点で団結した反対派の運動に結びついたことによって実現した。この事件は、その原因が国内外の陰謀ではなくアカエフ政権の抱える問題にあったという点、大衆の積極的な参加があったという点で革命と呼びうる。政治体制の根本的な変革を（今のところ）もたらしていないという意味では、革命とは呼べない。政治学的には後者の側面を重視すべきだという意見もあるであろう。しかしだからといって「政変」と呼ぶと<sup>82</sup>、単純なエリート内部の対立というニュアンスが強まり、この事件が大衆の動員・参加を伴ったものであること、前政権の積極的だが矛盾に満ちた民主化・市場経済化政策に起因する社会変動のダイナミズムに根ざしたものであることが、見落とされてしまう。本稿では、革命を意図や結果から定義するのではなく、

<sup>79</sup> *Slovo Kyrgyzstana*, 16.08.2005.

<sup>80</sup> “Glava MID KR prizval OBSE napravliat’ finansovye sredstva na realizatsiiu konkretnykh ekonomicheskikh i ekologicheskikh proektov,” *AKIpress*, 07.12.2005 [<http://kg.akipress.org/news/24109>]; “Zaiavlenie MID KR po povodu vyskazyvaniia Posla SShA M. Iovanovich o vstuplenii Kyrgyzstana v HIPC,” *AKIpress*, 18.04.2006 [<http://kg.akipress.org/news/27500>].

<sup>81</sup> “K. Bakiev potreboval ot SShA reshit’ vopros ob aviabaze v ‘Manase’ do 1 iunia,” *AKIpress*, 19.04.2006 [<http://kg.akipress.org/news/27532>]. 交渉は 7 月 14 日まで長引いたが、とりあえず 2007 年にアメリカが総額 150 万ドルの援助・補償を行うことで妥結した。

<sup>82</sup> クルグズスタンやロシアでこの事件を否定的に見る人は、*revoliutsiia*（革命）ではなく *perevorot*（陰謀による政変、クーデタ）という言葉を使う。

暴力的な闘争を伴う権力のダイナミクスとして分析する方法も有効だというペルクマンズの意見<sup>83</sup>に賛同し、あえて「革命」という言葉を使った。革命としては不完全だという主張も理解できるが、その立場に立つとすれば、「大衆行動を伴う政変」というような説明を常に付けなければならなくなるだろう<sup>84</sup>。

革命は、クルグズスタンがしばしば言われるように固定的な地域主義・部族主義に染まった社会ではなく、大統領をも追い落とすネットワークを機動的に形成する活力ある社会であることを示した。しかし、デモや道路封鎖などの実力行使に頼るという現象は、選挙やメディアなどの制度を通じた国民の政治参加が十分に機能してこなかったことをも意味する。また、エリート内部の動きも、政党政治ではなく政治家個人の離合集散という人的ネットワークの性格が強く、さらにはそこに犯罪分子がからむことによって、政治過程の不透明性と国民からの不信が払拭しにくくなっている。「街頭政治」の形で大衆が政治参加し、末期症状に陥った政権を倒すことは、民主主義の意味を政治家と国民に再認識させる効果を持つが、それが民主政治の制度化に結びつくかどうかは別問題である。むしろ、政治家が個別的な利益に沿って大衆を動員するという、革命を可能にした行動様式そのものが、革命後も政治エリートの統合を難しくし、政権内外の対立を社会不安に結びつきやすくさせているという側面を指摘しておかなければならない。

[本稿執筆のために行った現地調査の準備に当たっては、多くの方のお世話になったが、特に田中哲二中央アジア・コーカサス研究所長と、オムルカン・アバスカノフ氏に感謝申し上げたい。また、草稿を読んで貴重なアドバイスをしてくださった吉田世津子氏に深くお礼申し上げる。ただし言うまでもなく、本稿の内容は筆者一人の責任に帰するものである。]

---

<sup>83</sup> Pelkmans, "On Transition and Revolution," p. 156 (n.3).

<sup>84</sup> 本稿でも、大衆行動や社会ネットワークに注目することなくしてクルグズスタン革命を理解できないことは示せたものの、情報不足のため、それらについて十分具体的な分析ができなかったことを反省点として挙げておかなければならない。従来、社会ネットワークの分析は人類学者、政治の分析は政治学者が全く別々に行うことが多かったが、今後そうした壁を乗り越える研究が増えることを期待したい。

## 付録1 国会選挙での当選者（2005年3月26日中央選挙管理委員会発表）<sup>85</sup>

（下線を付したのは、第1回投票で過半数の票を得て、決選投票を経ずに当選した者。選挙区名の後の括弧内は、全国の選挙区にふられた通し番号で、本文ではこれに基づき「第〇選挙区」として言及した）

### 1. アルガ・クルグズスタン党からの立候補者（18人）

ロマン・シン（ビシケク市アフンバエフ選挙区(4)。朝鮮人）

オレグ・ジュラヴリョフ（ビシケク市ユヌサリエフ選挙区(5)。ロシア人）

マムトバイ・サルムベコフ（ビシケク市クレンケエフ選挙区(9)。クルグズ人）

オリガ・ベズボロドヴァ（ビシケク市クルルシュ選挙区(11)。バシキール人）<sup>86</sup>

アスカルベク・シャディエフ（バトケン州スルクトゥ選挙区(12)。クルグズ人）

アルズベク・ブルカノフ（バトケン州バトケン選挙区(14)。クルグズ人）

アイティバイ・タガエフ（バトケン州クズルクヤ選挙区(17)。クルグズ人）

タユルベク・サルパシェフ（ジャララバード州トクトグル選挙区(21)。クルグズ人）<sup>87</sup>

オスモンベク・アルトゥクバエフ（ジャララバード州カラコル・タシュコムル選挙区(22)。クルグズ人）

エルゲシュ・トロバエフ（ジャララバード州クズルトゥ選挙区(28)。クルグズ人）

アスカル・サルムベコフ（ナルン州アトバシユ選挙区(32)。クルグズ人）<sup>88</sup>

マハンマドジャン・ママサイドフ（オシュ州アラヴァン選挙区(49)。ウズベク人）<sup>89</sup>

アサミディン・マリポフ（オシュ州イサノフ選挙区(51)。クルグズ人）

アブドゥラフマン・アブドゥッラエフ（オシュ州グリスタン選挙区(52)。ウズベク人）

ヌルディン・アブドゥルダエフ（チュイ州トクモク選挙区(58)。クルグズ人）

アイダルベク・ケリムクロフ（チュイ州チュイ選挙区(59)。クルグズ人）<sup>90</sup>

アヴァスベク・モムンクロフ（チュイ州ウスク・アタ選挙区(61)。クルグズ人）

ダミル・オスコンバエフ（チュイ州ソクルク選挙区(65)。クルグズ人）

<sup>85</sup> Tsentral'naia komissiiia po vyboram i provedeniiu referendumov Kyrgyzskoi Respubliki, "Postanovlenie 'O registratsii deputatov Zhogorku Kenesha Kyrgyzskoi Respubliki,'" 26.03.2005 [<http://www.shailoo.gov.kg/jogorku/results/?all=1>] を基礎に、選挙区ごとの立候補者に関する詳しい情報 [<http://www.shailoo.gov.kg/jogorku/candidats/form/?all=1>] や、さまざまなニュースを照合して作成。選挙当時の各人の立場を知ることは困難な場合が多く、便宜的な区分を含んでいることをお断りしておく。また、3月26日以降の当選者の変更や議員の辞任・死亡、改選などについてはこの付録の末尾および注に記した。現議員の一覧は国会のサイト [[http://www.kenesh.kg/GK/Content.aspx?ps=dep\\_list](http://www.kenesh.kg/GK/Content.aspx?ps=dep_list)] で見ることができる。

<sup>86</sup> 2005年7月に行われた再選挙で、彼女を破って旧反対派のカバイ・カラベコフ（クルグズ人）が当選。

<sup>87</sup> 彼の対立候補マディヤロフの支持者たちの動きについては本文 1.2 参照。

<sup>88</sup> 第1回投票で当選を決めたのち、対立候補ナケン・カシエフ前ナルン州知事が裁判所に不服を申し立てたが、2005年3月15日に裁判所はサルムベコフの当選を認める判決を下した。アカエフ派であるはずの人々の間でも争いが起きた例である。

<sup>89</sup> 唯一の対立候補はやはりウズベク人で村長のトゥルスンバイ・アリモフ。アリモフ派は、355票差でママサイドフが1位となった第1回投票結果を認めず、2月28日に抗議集会を開いた。

<sup>90</sup> 彼の対立候補の一人トゥラトベク・アンダシェフは、第1回投票で得票第1位であったにもかかわらず、裁判所の決定で決選投票から外された。これを不満とするアンダシェフの支持者たちは、4月27日からの最高裁占拠（本文 1.2 参照）に参加した。

## 2. アディレット党からの立候補者 (4 人)

カムチュベク・ジョルドシュバエフ (ビシケク市ガガーリン選挙区(3)。クルグズ人)  
ベクテミル・ムルズブライモフ (オシュ市「オシュ 3000」選挙区(46)。クルグズ人)  
イサ・オムルクロフ (チュイ州カント選挙区(60)。クルグズ人)  
ザミルベク・エセナマノフ (チュイ州アルクル選挙区(68)。クルグズ人)

## 3. 「新しい力」党からの立候補者 (1 人)

クバヌチュベク・イサベコフ (イッシク・クリ州ジェティオグズ選挙区(74)。クルグズ人)

## 4. 自薦で立候補したアカエフ派 (7 人)<sup>91</sup>

ベルメト・アカエヴァ (ビシケク市大学選挙区(1)。クルグズ人)<sup>92</sup>  
ジュルガルベク・スラバルディエフ (ビシケク市トゥンドゥク選挙区(8)。クルグズ人)<sup>93</sup>  
ユーリー・ダニーロフ (ビシケク市ジベクジョル選挙区(10)。ロシア人)<sup>94</sup>  
サイディッラ・ヌシャノフ (ジャララバード州カラウンクル選挙区(25)。クルグズ人)  
カドウルジャン・バトゥロフ (ジャララバード州ジャララバード選挙区(30)。ウズベク人)  
アイダル・アカエフ (チュイ州ケミン選挙区(57)。クルグズ人)<sup>95</sup>  
カヌベク・イマナリエフ (チュイ州アラムドゥン選挙区(62)。クルグズ人)<sup>96</sup>

## 5. 立場の不明瞭な者 (大部分は恐らく中間派ないしアカエフ派) (31 人)<sup>97</sup>

シャリパ・サドゥバカソヴァ (ビシケク市アサンバエフ選挙区(6)。クルグズ人)<sup>98</sup>  
アジズベク・トゥルスンバエフ (ジャララバード州チャトカル・アラブカ選挙区(18)。クルグズ人)  
カンバルル・コンガンティエフ (ジャララバード州マイルスー選挙区(23)。クルグズ人)<sup>99</sup>

<sup>91</sup> 本人の立場がそれほど明確でない場合でも、政権の意を受けてバキエフをつぶす役割を果たしたと見られる者は、便宜上アカエフ派と見なした。

<sup>92</sup> 2000 年 5 月に当選を取り消され、その空席をめぐる 9~10 月の選挙でボロトベク・マリポフ (クルグズ人) が当選。

<sup>93</sup> 2005 年 6 月 10 日に殺害された。その空席をめぐる 11 月の選挙でジャヌシュ・クダイベルゲノフ (クルグズ人) が、オトゥンバエヴァらを破って当選。

<sup>94</sup> 彼の態度を直接示す資料は見当たらないが、選挙前にアカエフ派のテレビ KOORT で非常に好意的に取り上げられていた。Internews – OSCE – Cimeria, *Vybory – 2005: Monitoring osveshcheniia vyborov v SMI Kyrgyzskoi Respubliki (Vybory v Parlament)* [[http://www.osce.org/documents/cib/2005/06/15138\\_ru.pdf](http://www.osce.org/documents/cib/2005/06/15138_ru.pdf)].

<sup>95</sup> 父である前大統領と共にロシアに逃亡したが、2006 年 7 月現在、形式上議席を保っている。

<sup>96</sup> アカエフの元報道官。

<sup>97</sup> このうち氏名の前に\*を付けた 8 人は、アルガ・クルグズスタン党ないしアディレット党の候補がいる選挙区で当選した者であり、アカエフ派というよりは中間派である可能性が高いが、本文 2.4 で述べたように、明らかにアカエフ派である候補が複数立った選挙区も多いため、断定はできない。なお、下記の反対派のムカシェフはアルガ・クルグズスタン党の候補者を、シェルニヤゾフはアディレット党の候補者をそれぞれ破って当選した。

<sup>98</sup> 2005 年 4 月に当選を取り消され、代わりに旧反対派のメリス・エシムカノフ (クルグズ人) の当選が認められた。

カムチュベク・タシエフ (ジャララバード州バルブ選挙区(29)。クルグズ人)  
ラシド・タガエフ (ジャララバード州コガルト選挙区(31)。クルグズ人)  
カルガンベク・サマコフ (ナルン州ナルン選挙区(33)。クルグズ人)<sup>100</sup>  
ソーロンバイ・ジェーンベコフ (オシユ州カラクルジャ選挙区(36)。クルグズ人)  
ウルグベク・オルモノフ (オシユ州ジャズ選挙区(38)。クルグズ人)  
イノム・アブドゥラスロフ (オシユ州ナリマン選挙区(42)。ウズベク人)  
アリシエル・サビロフ (オシユ市オシユ選挙区(45)。ウズベク人)  
ダヴラン・サビロフ (オシユ市ドストゥク選挙区(48)。ウズベク人)  
イスカンデル・ガユプクロフ (オシユ州ケルメト選挙区(50)。クルグズ人)  
ジャディン・ジャマルディノフ (オシユ州コクジャル選挙区(53)。クルグズ人)  
ジュspb・イマナリエフ (タラス州バカイアタ選挙区(55)。クルグズ人)<sup>101</sup>  
オムルベク・ババノフ (タラス州カラブーラ選挙区(56)。クルグズ人)  
ハジムラト・コルクマゾフ (チュイ州フルンゼ選挙区(63)。カラチャイ人)  
テミル・サリエフ (チュイ州ショポコフ選挙区(64)。クルグズ人)  
セルゲイ・ポポフ (チュイ州アクスー選挙区(66)。ロシア人)  
ターライベク・スバンベコフ (チュイ州カラバルタ選挙区(67)。クルグズ人)  
トウスチュベク・アクマトバエフ (イッシク・クリ州バルクチュ選挙区(69)。クルグズ人)<sup>102</sup>  
タシククル・ケレクシゾフ (イッシク・クリ州イッシク・クリ選挙区(70)。クルグズ人)<sup>103</sup>  
サドウル・ジャパロフ (イッシク・クリ州テュプ選挙区(71)。クルグズ人)<sup>104</sup>  
スルタン・ウルマナエフ (イッシク・クリ州アクスー選挙区(73)。クルグズ人)<sup>105</sup>  
\*ムラト・ジュラエフ (バトケン州レイレク選挙区(13)。クルグズ人)

---

<sup>99</sup> 検事総長就任後の2006年1月に議員を辞職。その空席をめぐる同年5月の選挙でアクルベク・アルスタンベコフ(クルグズ人)が当選。

<sup>100</sup> 選挙結果をめぐる旧反対派のイシェンバイ・カドゥルベコフとの争いがしばらく続き、2005年4月に支持者がナルン州庁舎を占拠し、ビシケク〜トルガルト街道を封鎖した。“Liudi, zakhvativshie zdanie Narynskoj obladministratsii, namereny ostavat’sia tam do priznaniia pobedy K. Samakova neosporimoi,” *Kabar*, 06.04.2005 [http://www.centrasia.ru/newsA.php4?st=1112806080].

<sup>101</sup> 選挙結果をめぐる旧反対派のジェーンベコフ(本文1.1参照)との争いがしばらく続き、4月にイマナリエフの支持者が大統領・政府庁舎前でピケを張った。Iurii Gruzlov, “Zabava vzroslykh – shturm ‘Belogo doma,’” *Moia stolitsa*, 13.04.2005 [http://www.msn.kg/page.shtml?option=item&year=5&mon=4&id=9939].

<sup>102</sup> 2005年10月20日に殺害された。その空席をめぐる2006年4月の選挙でルスベク・アクマトバエフが第1位の票を得たが、中央選管に当選を認められないうちに殺害された(本文4.3参照)。

<sup>103</sup> かつてアカエフ一家と親しかったとされるが、2003年以降公職から退き、アカエフの逃亡後には辞任を説得するための国会代表団の一員としてモスクワに赴いた。議会にはほとんど出席していない。Vadim Nochevkin, “‘Lishit’ deputatskikh polnomochii!,” *Delo No....*, 14.04.2006 [http://www.gazeta.kg/press/2006/04/14/parliament/].

<sup>104</sup> 選挙前にいったん候補者登録を取り消されたが、支持者が抗議集会を開いた後、登録を回復した。

<sup>105</sup> 第2回投票後、彼が軽油と石炭を配ると言っていたのに約束が果たされていないとして、有権者が抗議行動を起こした。“Ostapy-kandidaty,” *Anten TV*, 17.03.2005 [http://asia.internews.kg/lofiversion/index.php/t31.html]. (2006年5月1日閲覧)

- \* ラユムベク・マムロフ (ジャララバード州ケルベン選挙区(19)。クルグズ人)
- \* エルキン・バイサロフ (ナルン州ジュムガル・アクタラー選挙区(35)。クルグズ人)
- \* ジヤントロ・サトゥバルディエフ (オシュ州ムルザ・アケ選挙区(37)。クルグズ人)<sup>106</sup>
- \* ムラトベク・マラバエフ (オシュ州オトゥザドウル選挙区(40)。クルグズ人)<sup>107</sup>
- \* アフマトベク・ケルディベコフ (オシュ州クルマンジャン・ダトカ選挙区(43)。クルグズ人)
- \* アリヤルベク・アブジャリエフ (オシュ市ジャパラク選挙区(47)。クルグズ人)
- \* エルキンベク・アルムベコフ (イッシク・クリ州カラコル選挙区(72)。クルグズ人)

## 6. 反対派 (8人)

- クバトベク・バイボロフ (ビシケク市ジャル選挙区(2)。クルグズ人)
- ムラトベク・ムカシェフ (ビシケク市トゴロク・モルド選挙区(7)。クルグズ人)
- イスハク・マサリエフ (共産主義者党。バトケン州アイダルケン選挙区(15)。クルグズ人)
- バヤマン・エルキンバエフ (バトケン州カダムジャイ選挙区(16)。クルグズ人)<sup>108</sup>
- アジムベク・ベクナザロフ (ジャララバード州アクス選挙区(20)。クルグズ人)<sup>109</sup>
- ドーロンベク・サドウルバエフ (ジャララバード州ノーケン選挙区(24)。クルグズ人)
- オムルベク・テケバエフ (ジャララバード州アクマン選挙区(26)。クルグズ人)
- ボロトベク・シェルニヤゾフ (タラス州タラス選挙区(54)。クルグズ人)

なお、2005年3月26日の時点ではアルガ・クルグズスタン党のアブドゥムタリプ・ハキモフ候補(ジャララバード州バザルコルゴン・スザク選挙区(27)、ウズベク人)は、ウズベキスタン国籍を持っていると理由で当選を認められず、対立候補のザミルベク・ムラタリエフ(アディレット党)との間で争いが続いていたが、その後当選が認められた。

ナルン州コチコル選挙区(34)では、6月に行われた選挙でラハトベク・イルサリエフが当選。オシュ州クルシャブ選挙区(39)では、旧反対派のアダハン・マドゥマロフの当選が、曲折を経て9月に確定したが、副首相就任後の10月に議員辞職し、その空席をめぐる2006年4月の選挙でママト・オロズバエフが当選(ただしその後も対立候補との争いで混乱が続く)。オシュ州カラスー選挙区(41)では、旧反対派のアラブバイ・トロノフの当選(アルガ党の候補を破る)が4月に確定。オシュ州アライ選挙区(44)では、旧反対派のマラ

<sup>106</sup> 2006年5月にオシュ州知事に任命されたのに伴い、同年6月に議員資格を失った。

<sup>107</sup> アカエフ時代に関税関係の要職にあった際に不正蓄財をした疑いがある。2005年4月末以降公衆の面前に現れていない。Nochevkin, “‘Lishit’ deputatskikh polnomochii!”

<sup>108</sup> 2005年9月21日に殺害された。その空席をめぐる2006年4月の選挙でノマンジャン・アルカバエフ(クルグズ人)が、エルキンバエフの未亡人らを破って当選。

<sup>109</sup> 検事総長就任後の2005年8月に議員を辞職したが、検事総長の職を解かれた後、11月の選挙で再び当選した。



ト・スルタノフの当選が4月に確定。イッシク・クリ州トン選挙区(75)では、6月に行われた選挙で旧反対派のアルスランベク・マリエフが当選<sup>110</sup>（以上の当選者はいずれもクルグズ人）。

---

<sup>110</sup> これらの選挙区の2005年2～3月の状況については本文1.1参照。

## 付録2 クルグズスタン新政権の指導者・閣僚の略歴（名前の綴りは便宜上ロシア語）<sup>111</sup>

①生年 ②出生地 ③学歴 ④主な経歴 ⑤アカエフ政権末期の地位

大統領 クルマンベク・バキエフ Бакиев Курманбек Салиевич

①1949 ②ジャララバード州スザク地区 ③1978年クィブイシエフ工科大卒 ④電機工場の技師、工場長を経て共産党市委員会第一書記、郡長、ジャララバード州知事、チュイ州知事、首相を歴任 ⑤2002年から国会議員（反対派）

首相 フェリクス・クロフ Кулов Феликс Шаршенбаевич

①1948 ②ビシケク市 ③1971年ソ連内務省オムスク高級学校卒、1978年ソ連内務省アカデミー卒 ④内務省勤務を経て内務相、副大統領、チュイ州知事、国家保安相、ビシケク市長を歴任 ⑤2000年逮捕、服役

国会議長 マラト・スルタノフ Султанов Марат Абдыразакович

①1960 ②ビシケク市（小学校時代はオシュ州で育つ） ③1983年モスクワ鋼鉄・合金大卒 ④クルグズ国立大助教授代行、国立銀行課長、1994-98年国立銀行総裁、1999年財務相 ⑤2000年から国会議員

前・国会議長 オムルベク・テケバエフ Текебаев Омурбек Чиркешович

①1958 ②ジャララバード州バザルコルゴン地区 ③1981年クルグズ国立大物理学部卒、1994年同大法学部卒 ④学校教師、オシュ教育大実験助手、ソ連最高会議議員、ジャララバード州副知事、国会議員・副議長など歴任 ⑤2002年から憲法評議会副議長（反対派）

大統領府長官 ウソン・ストゥコフ Сыдыков Усен Сыдыкович

①1943 ②ジャララバード州ノーケン地区 ③1965年クルグズ農業大卒、1986年アルマトゥ高級党学校卒 ④共産党地区委員会第一書記、国家農工委員会議長、共産党オシュ州委第一書記、ソ連最高会議議員、国営食糧企業社長、国会議員など歴任 ⑤2000年(?)から CIS 執行委員会副議長（反対派）

---

<sup>111</sup> 主な典拠はクルグズ共和国政府サイト [[http://www.government.gov.kg/index.php?name=EZCMS&menu=31&page\\_id=29](http://www.government.gov.kg/index.php?name=EZCMS&menu=31&page_id=29)] (2006年4月13日閲覧)、および Pavlovskii, ed., *Kirgizskii perevorot* であり、部分的に他のインターネット情報などで補った。この顔ぶれは、2005年12月2日にケリムクロフ第一副首相の任命が国会承認されてから、2006年4月24日にアタムバエフ産業・通商・観光大臣が辞任するまでのものである。06年5月には以下のような人事異動が行われた。ストゥコフ大統領府長官が解任され国家顧問に就任。新しい大統領府長官にムクトゥベク・アブドゥルダエフ（1953年チュイ州生まれ、コムソモールと内務省に長く勤め、アカエフ時代末期に検事総長）。サルグロフ国家書記が辞任し、後任にマドゥマロフ前副首相。第一副首相代行にウソノフ（1960年ビシケク生まれ。注45参照）。副首相代行にボルジュロヴァ（1951年イシク・クリ州生まれ。本文4.2参照）。農業・水利・加工産業大臣代行にアジム・イサベコフ前大統領府副長官（1960年チュイ州生まれ）。産業・通商・観光大臣代行にケリムクロフ前第一副首相。これら4人の大臣代行のうち3人は6月26日に国会の承認を得て正式の大臣となったが、ボルジュロヴァは承認されず、代わりにトゥヌチュベク・ダブルディエフ前大統領府副長官（1955年ジャララバード州生まれ。元アルガ・クルグズスタン党幹部）が7月3日に副首相代行となった。また、この一覧には含まれないが、国民保安部長官がタシュテミル・アイトバエフ（1943年ナルン州生まれ）からブスルマンクル・ダブルディエフ前大統領府国防安保部長（1949年タラス州生まれ）に替わった。

国家書記 **ダスタン・サルグロフ Сарыгулов Дастан Исламович**

①1947 ②タラス州タラス地区 ③1970年レニングラード建築技師大卒 ④技師、共産党イッシク・クリ州委書記、タラス州知事などを経て 1992-99年国営金採掘コンツェルン「クルグズアルトゥン」総裁、1995-2000年国会議員 ⑤2002年から、自らが創設した民族遺産保存基金「テンギル・オールド」議長

第一副首相 **メデトベク・ケリムクロフ Керимкулов Медетбек Темирбекович**

①1949 ②チュイ州ウスク・アタ地区 ③1972年フルンゼ工科大卒 ④建設技師を経てトクモク市長、オシュ市長、ビシケク市第一副市长など歴任 ⑤1999年からビシケク市長

副首相 **アダハン・マドウマロフ Мадумаров Адахан Кимсанбаевич**

①1965 ②オシュ州ウズゲン地区 ③1992年トヴェリ大（ロシア）歴史学部卒 ④国営テレビラジオ会社勤務 ⑤1995年から国会議員（反対派）

首相官房長官、大臣 **トウルスベク・コヨナリエフ Коеналиев Турусбек Кармышевич**

①1962 ②チュイ州アラムドゥン地区 ③1990年クルグズ大文学部卒 ④警官（大学入学前）、大学教員を経て首相補佐官、首相顧問、在独大使館一等書記官、保険会社副社長など歴任 ⑤2004年から情報リソース・テクノロジー庁官房長

内務大臣 **ムラト・スタリノフ Суталинов Мурат Абдыбекович**

①1963 ②ビシケク市 ③1984年ソ連内務省カラガンダ高級学校卒 ④内務機関勤務。チュイ州内務局長、内務省刑事総局長、オシュ州内務局長など歴任 ⑤2004年から大統領府国防・安全保障部長。革命前日に検事総長代行

保健大臣 **シャイローベク・ニヤゾフ Ниязов Шайлообек Ниязович**

①1946 ②チュイ州モスクワ地区 ③1971年クルグズ医科大卒 ④医学校講師・校長、地区病院医長、チュイ州保健局長を歴任 ⑤2000年から国立病院医長

外務大臣 **アリクベク・ジェクシェンクロフ Джекшенкулов Аликбек**

①1957 ②ナルン州コチコル地区 ③1980年ウクライナ農業アカデミー卒 ④クルグズスタン・コムソモール中央委書記、国会国際関係委員長、外務第一次官、在オーストリア大使など歴任 ⑤2004年から大統領府副長官兼外政部長

文化大臣 **スルタン・ラエフ Раев Султан Акимович**

①1958 ②オシュ州カラスー地区 ③1984年クルグズ国立大ジャーナリスト学部卒 ④クルグズ語紙の記者、1991-2002年「クルグズの魂」紙編集長、2002-04年教育文化次官 ⑤2004年から芸術文化発展支援基金議長

国防大臣 **イスマイル・イサコフ Исаков Исмаил Исакович**

①1950 ②オシュ州アライ地区 ③1973年タシケント高級総合兵科学学校卒、1984年フルンゼ記念軍事ア

カデミー（モスクワ）卒 ④ソ連時代はハンガリー、ウクライナなどで将校・指揮官として勤務。1996–99年国防第一次官 ⑤2000年から国会議員（反対派）

教育・科学・青年政策大臣 ドスボル・ヌルウール Нур уулу Досбол

①1948 ②タジキスタンのシュラブ市（バトケン州に隣接） ③1971年クルグズ国立大歴史学部卒 ④クルグズ共和国科学アカデミー歴史研究所研究員、1995–2000年国会議員 ⑤2000年から国会上級コンサルタント（反対派）

農業・水利・加工産業大臣 アブディマリク・アナルバエフ Анарбаев Абдималик Абдырахманович

①1952 ②オシユ州ノーカト地区 ③1973年ミチューリン記念園芸大（ロシアのタンボフ州）卒 ④ソフホーズ農業技師・議長、クルグズスタン共産党中央委指導員、農業食糧次官、ウズゲン地区長など歴任 ⑤農業・水利・産業省局長

運輸通信大臣 ヌラン・スライマノフ Сулайманов Нурлан Чолпонбаевич

①1958 ②オシユ州チョン・アライ地区 ③1982年フルンゼ工科大卒 ④道路技師、1992–98年南部建設局長 ⑤1998年からビシケク～オシユ街道管理局長

労働社会保障大臣 エヴゲニー・セメネンコ Семенов Евгений Григорьевич

①1948 ②チュイ州モスクワ地区 ③1977年クルグズ国立大歴史学部卒、1986年クルグズ農業大卒、1990年ソ連共産党社会科学アカデミー卒 ④クルグズスタン・コムソモール中央委書記、クルグズスタン共産党タラス市委第一書記、労組スポーツ協会共和国協議会局長、外務省外交団サービス局長など歴任 ⑤2004年から大統領府総務部付属国営外交サービス社社長

財務大臣 アクルベク・ジャパロフ Жапаров Акылбек Усенбекович

①1964 ②イッシク・クリ州バルクチュ市 ③1986年フルンゼ工科大卒、2002年ビシケク財務経済アカデミー卒 ④フルンゼ工科大研究員、大統領府青年政策課長、社民党本部長、第一副首相補佐官、国税監督機関徴税局長など歴任 ⑤2000年から国会議員

非常事態大臣 ジャヌシュ・ルステンベコフ Рустенбеков Джаныш Султанкулович

①1949 ②チュイ州ウスク・アタ地区 ③1973年モスクワ・エネルギー大卒 ④クルグズスタン・コムソモール中央委部門長、共産党フルンゼ市委副課長、フルンゼ市地区ソヴェト議長、大統領府長官、オシユ州知事、林野庁長官など歴任 ⑤2000年から国会議員

産業・通商・観光大臣 アルマズベク・アタムバエフ Атамбаев Алмазбек Шаршенович

①1956 ②チュイ州アラムドゥン地区 ③1980年モスクワ経営アカデミー卒 ④クルグズ共和国最高会議幹部会勤務、フルンゼ市地区ソヴェト執行委副議長、1995–2000年国会議員（一時、自動車部品工場社長を兼任）、2000年大統領選に立候補 ⑤詳細不明（反対派）

法務大臣 マラト・カユポフ Кайыпов Марат Таштанович

①1960 ②ジャララバード州ノーケン地区 ③1986年クルグズ国立大法学部卒 ④フルンゼ市内務局刑事、副大統領補佐官、内閣府課長、最高調停裁第一副長官、大統領府法務課長など歴任 ⑤1999年から憲法裁判事

移民・雇用問題国家委員会議長 アイグル・ルスクロヴァ Рыскулова Айгуль Маратбековна

①1964 ②ビシケク市 ③1995年労働・社会関係アカデミー（モスクワ）卒 ④ビシケク市地区裁判所長補佐官、労働・社会保障省課長、国家雇用局長など歴任 ⑤2003年から共和国社会基金本部長

国有財産管理国家委員会議長 トウルスン・トゥルドウマンベトフ Турдумамбетов Турсун Осмоналиевич

①1957 ②イッシク・クリ州アクスー地区 ③1979年フルンゼ工科大卒 ④機械技師、アクスー地区ソヴェト議長、ソフホーズ議長、国有財産基金第一副議長など歴任 ⑤2001年から国有財産基金議長